どんどこと 育て大きく 子どもたち
どんどこ NPOプロジェクト
子どものための児童館とNPOの協働事業

どんどこブックⅡ

子どものための児童館とＮＰＯの協働事業

2011 年度－2015 年度 報告書

www.npo-dondoko.net

日本NPOセンター

認定特定非営利活動法人 日本ＮＰＯセンター

www.jnpoc.ne.jp

目次

内容

■ はじめに 3
■ 「子どものための児童館とＮＰＯの協働事業」 （通称：ＮＰＯどんどこプロジェクト）とは 4
■ 「どんどこ」を支える人たち 6
■ 「どんどこ」は「子どもが真ん中」 7
■ 「どんどこ的協働の５か条」 虎の巻 ～コレ大事！～ 8
■ 児童館インタビュー①【北海道札幌市・東苗穂児童会館】 9
■ 児童館インタビュー②【新潟県燕市・小中川児童館】 12
■ 児童館インタビュー③【京都府京都市・修徳児童館】 15
■ 児童館インタビュー④ 【福岡県北九州市・複数の児童館】 18
■ どんどこの広がり～アンケート結果から～ 22
■ ＮＰＯどんどこプロジェクト 2011～2015 年度実績 30
■ おわりに～児童館の現状と「NPO どんどこプロジェクト」～ 35

※表紙の写真は、北海道・東苗穂児童会館の 2013 年度「東苗穂キッズ農園」のプログラムの様子です。

■ はじめに

早いもので、もう 10 年

平成 19 年度から「子どものための NPO との協働事業」がはじまった。平成 19 年は、住友生命が創業 100 周年にあたり、「子育て支援」をテーマとする事業に取り組んだ年であった。この動きに呼応して、当財団においても、これまでの老人、要介護者といった社会的弱者への支援の枠組みを子どもたちにも拡大する事業として関わったことが発端であった。

各地の児童館を舞台に子どもと多分野 NPO との出会いを創出するプロジェクトであり、遊びや体験、創作などの取組を通して、地域全体で子どもを支える環境づくり、子どもに対する多様な角度からの社会教育の推進を目指してはじまり、早いものでもう 10 年が経過した。

最初に訪れたのは、京都市の修徳児童館の事業で、修学地区松原通りは、平安・鎌倉時代より由緒ある通りだ。だが今は、商店街の店舗数も減りちょっと寂しい雰囲気の町並みとなっている。その通りをなんとかしようと「松原通界隈活性化活動プロジェクト委員会」からこの事業がはじまった。特に印象に残っていることは、児童館がいろいろなブースを出店して、そこで児童館の子どもたちが店長となり、頑張っている姿。生き生きとした子どもたちの表情。子どもたちが主体であり、活躍の場を得た子どもたちの笑顔、動きが印象的であった。

この 10 年、「自然環境との触れ合い」・「まちおこしに参加」等様々な事業が展開されてきたが、現在は、震災をテーマにした事業が全国の児童館で見られている。今あらためて、地域と関わり合いを持ち、各 NPO がサポートをしていく中、子どもたちが主体性をもってすこやかに成長していくことを願っている。

一般財団法人 住友生命福祉文化財団
副局長兼福祉事業部長 吉田満留

■　「子どものための児童館とＮＰＯの協働事業」（通称：ＮＰＯどんどこプロジェクト）とは

「子どものための児童館とNPOの協働事業」は、全国のNPOがいきいきと活動できる環境を作る活動をしている特定非営利活動法人日本NPOセンターと、児童館を応援し子どもたちの健全育成を支える一般財団法人児童健全育成推進財団が、2007 年度から実施しているプロジェクトです。

子育てをめぐる環境が大きく変化している中、学校や子育て活動に取り組む団体など子どもに関わる多様な主体が、さまざまな工夫を行っています。

そのような中で、個々人が、自身の能力やチャンスを犠牲にすることなく、次世代が健全に育つ環境を作るためには、「地域ぐるみで共に支え育ちあう」仕組みを、多様な主体の「連携」で作り出すことが不可欠であると言われています。

そこで、行政の縦割りを超えて地域の課題に主体的に取り組んできたNPOと、子どもの拠点として活動してきた児童館との連携によって、子どもが地域の課題に触れる機会を提供し、子どもたちと地域が共に気付き、学びあう環境を作ることを目指して、2007 年度に本プロジェクトが始まりました。

初年度に、この新しい取り組みが太鼓をみんなで打ち鳴らすように「どんどこどんどこ」広がるようにと、「NPOどんどこプロジェクト」という通称をつけました。当初 5 年間はモデル地区を指定する形でのプロジェクトでしたが、そこで得た知見をもとに、2011 年度からは、児童館を対象とした公募型助成プログラムに移行しました。

児童館が主体的に企画を立て、応募する形式に移行したことで、実施地域が広がったことはもちろん、児童館と NPO「だけ」でなく、地域の多様な主体の連携が生み出され、現代的な課題解決をめざしたプログラムが実施されるなど、プロジェクトが文字通り「どんどこどんどこ」広がってきています。

本「どんどこブックⅡ」においては、インタビューや統計などの資料によって、その広がりを感じていただきたいと思っています。

ぜひご覧いただき、今後も、より多くのプログラムが生み出されればと願っています。

※2010 年度までのモデル事業の報告書は以下をご覧ください。
http://www.jnpoc.ne.jp/download/dondoko_book_ver2_20120608.pdf

児童健全育成推進財団が本プロジェクトで目指すこと

児童館は児童福祉法に規定された児童福祉施設の1つです。現在、全国に約 4,600 カ所あり、子どもたちの「遊びを通した健全育成」をはじめ、「切れ目のない子育て支援」「課題の発生予防と早期対応」などに取り組んでいる施設です。

これらの活動の基盤にあるのが、「地域」との豊かな関係性です。しかし、子どもの育ち・生活の場である地域が大きく変化しています。少子高齢化、子どもを狙う犯罪の増加、地域の教育力の低下、子どもの声が騒音と言われるなど、子どもを取り巻く環境が悪化し、保護者の意識も変化してきました。

子どもは「地域で、多様な出会い」により育っていくものと信じています。地域に根付いた活動をしてきた児童館が NPO とタッグを組んで、子どもにより良い環境をつくっていけるよう願っています。

日本ＮＰＯセンターが本プロジェクトで目指すこと

NPOが注目される契機の1つとなったNPO法成立からもうすぐ 20 年になろうとしています。人間で言えば成人式を迎えるタイミングです。一時のブームの時期は過ぎ、社会からも認知され、少しずつ「その活動によってどのような課題が解決したのか」という成果が問われるようになってきました。

地域の課題にいち早く気付き、その課題をもとに集い、専門性を持って取り組むのがNPOの特徴ですが、ますます複雑化する地域の課題を解決するためには、地縁をもとに、地域でつながりを作りながら取り組んでいる主体との協働が欠かせなくなってきています。そのパートナーとして、地域の拠点である児童館と組むことで、思いもよらない広がりを生むことができます。

このプロジェクトを契機に、地域内の多様な主体が「気になる」という気持ちを出し合い、つながり、刺激し合って、子どもも大人も一緒になって、自分たちの地域に愛着を持って関わるきっかけが増えれば幸いです。

実施体制

■主催 ： 特定非営利活動法人　日本NPOセンター
■協力 ： 一般財団法人　児童健全育成推進財団
■協賛 ： 一般財団法人　住友生命福祉文化財団

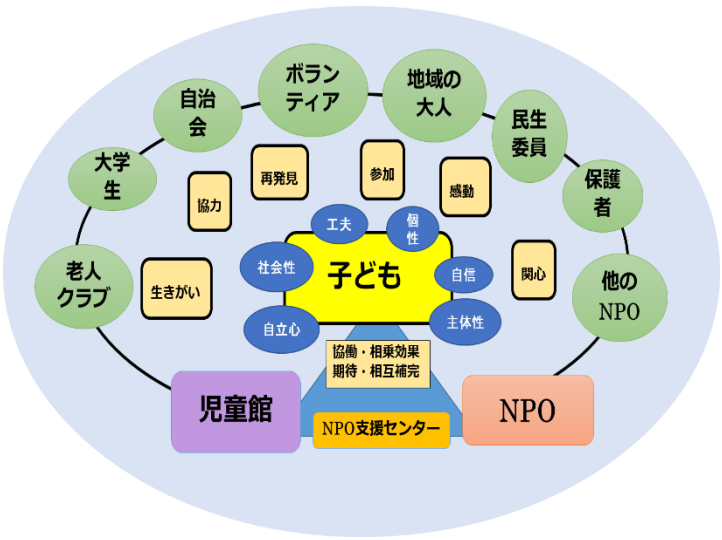
■ 「どんどこ」を支える人たち

「どんどこ」を支える人たちの広がり

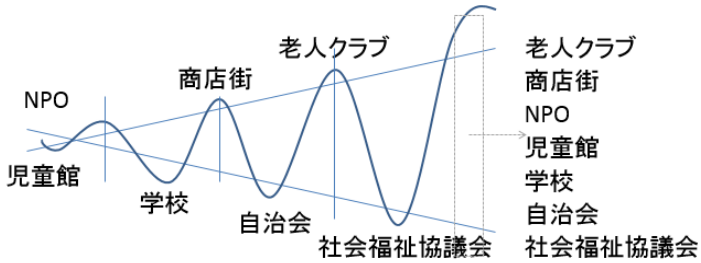
「NPOどんどこプロジェクト」は 2007 年度のスタート以来、「児童館」と「NPO」の協働に重きを置いてきましたが、プロジェクトを進める中で、児童館と NPO だけではなく、実に多くの方々が関わる事例が見られるようになってきました。

児童館と NPO がタッグを組み、新しい価値を創造しようと模索する中で、その取り組みに協力したい、参画したい、と思う人たちがまさに「どんどこ」と名乗りを挙げてくれたり、さらなる協力者を紹介してくれることで、音の波が広がるように、当初の想定を超えて協力者が広がる事例がしばしば見られます。こうしたプロセスを通して、関わった人たちが異質な他者と知り合い、互いに刺激を受け合うことで、プログラムがさらに発展するとともに、参画した人たち自身も変化していきます。

こうした「想定以上の広がり」を生み出すケースの多くで、NPO 支援センターなどの第三者がコーディネーター役として関わっていることが有効に働いています。



プログラムに関わる多様な事業関係者（イメージ）



事業関係者のどんどこ的広がりのイメージ

京都・修徳児童館（本ブック 15 頁、24 頁）

2013 年度に実施したプログラムがきっかけで、**大学生**や**アーティスト**が相談に来るようになり、2014 年度プログラムの発想につながった。その後、**商店街振興組合**からの声掛けで、2015 年度の商店街での町おこしイベントにつながった。時間の経過とともに関係者が「どんどこ」と広がった事例。

新潟・小中川児童館（本ブック 12 頁）

2012～13 年度は「避難所生活を体験しよう！」というプログラム。避難所運営は町をあげて行う必要があったため、多くの関係者に声掛けした。その結果、**まちづくり協議会、社会福祉協議会、中学校、防災分野の NPO、NPO 支援センター、市の防災課、看護専門学校生、食生活改善推進委員協議会、民生委員**などたくさんの関係者が一堂に会するイベントになった。「今まで連携したくても機会がなくてできなかったところと協働できた」との感想があった。

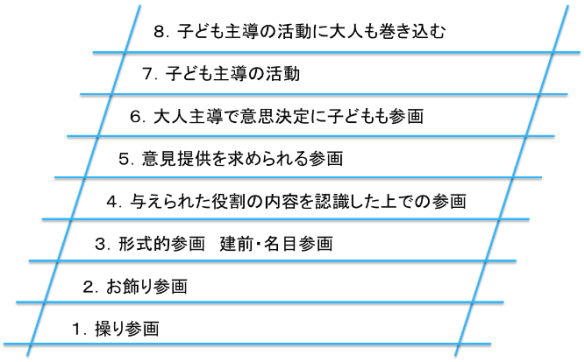
「どんどこ」が多くの方々の出会いの機会になっている事例。

■　「どんどこ」は「子どもが真ん中」

「どんどこ」と子どもの主体性

「NPO どんどこプロジェクト」は前述したように、多様な方々の参画に支えられていることが特徴ですが、もう一つの大きな特徴として、プログラムにおいて「子どもが真ん中」に据えられ、子どもたちの主体性が発揮されることを重視していることが挙げられます。

子どもたちの問題意識をもとにプログラムを構築したり、NPO が提供したプログラムに参加することで得た気付きや疑問を次のプログラムに取り入れ、子どもがプログラムの作り手になり、大人はその支え手になる工夫がされている事例があります。こうした取り組みは、子どもの発達心理学の研究者であるロジャー・ハート氏が提唱した「参画のはしご」の体現とも言えます。



『子どもの参画』（ロジャー・ハート著 萌文社 2000 年）より

糸満がじゅまる児童センターの 2015 年度プログラム『“みーかがん”の紙芝居をつくろう』では地元の漁師が考案したみーかがん（水中めがね）に実際に触れ郷土の先人の知恵やその功績について学びながら、子どもたちが紙芝居を作成した。
児童館担当者は「最後までやり遂げる力を子ども達がもっていることも驚きでしたが、積極的に発表もするようになり子ども達の成長が感じられました」と感想を述べている。「子どもが真ん中」のプログラムで、子どもが成長していく様子に、大人たちが驚き、喜ぶ様子が伝わってくる。

■　「どんどこ的協働の５か条」　虎の巻　～コレ大事！～

一、目的をブラさない

たとえ面白いアイデアや高い技術があっても、子どもの豊かな育ちにつながらなければ、大人たちの自己満足で終始するおそれがあります。この「子どもの豊かな育ちのため」という目的のもと、協力者たちが一致団結している取り組みほど、継続性やつながりの増幅も生まれやすい傾向があります。ただ、時にこの目的が薄らぐこともありますので、実施主体は、かかわる協力者に、この目的を明確に伝えたり確認したりする必要があります。

二、「数年後には…」というイメージで

「単年度では終わらせたくない！」という事業で、成果が想定外に大きくなっているものほど、実施者側が「3年後にこう持っていきたい！」という中長期的な目線で取り組まれています。取り組みの内容や連携先などについて、無理のない範囲で少しずつでもステップアップさせるイメージで企画を練ることで、次なる課題がよりクッキリなるでしょうし、計画も立てやすくなるでしょう。

三、分担上手は、協働上手

スタート間もない段階だと、協働相手や協力者の間で、互いに遠慮することもあると思いますが、「餅は餅屋」。無理や負担に思われることは、相談の上で分担したり、新たな協力者を求めるなどして、関わる皆が楽しみながら集中して取り組めるような役割分担体制づくりをしましょう。子どもたちの安全管理を含めてさまざまなリスクを回避することにもつながりますし、何より喜びや達成感も得られます。

四、つながって、ひろげよう

児童館とNPOの2者による魅力的なプログラムもありますが、さまざまな協力者とのつながりを意識していればいるほど、児童館の枠や空間を超えて、地域の人たちと一緒に、子どもをまん中にしたすてきなプログラムが実現しやすいです。口コミや新聞・テレビの活用などの広報PRも意識して、つながり（大なり小なりの参加の場づくり）を設けましょう。きっとその後も、何かと相談や連携をしやすくなるはずです。

五、「事業サポーター」は活かしてナンボ

児童館とNPOに限らず、異なる人たちで一つの物事に取り組むとなると、互いの理解や信頼関係づくりが不可欠です。初対面でもスムーズに取り組んで成果を上げていただけるよう、当プロジェクトでは、実施地域の近くにあるNPO支援センターが「事業サポーター」として、つなぎ役になったり、「少しだけこれまでの枠組みをはみ出してみる」ことを後押ししたりと、応援するしくみを設けています。何かと経験豊富な人たちばかりです。ぜひ細かな相談ごとも含めて積極的に活用しましょう。

■ 児童館インタビュー①【北海道札幌市・東苗穂児童会館】

子どもの「体感」を引き出し、地域とつながれた！

お話：東苗穂児童会館　三好達也さん

【採択プログラム】
2012 年度：「東苗穂キッズ農園」　2013 年度：「東苗穂キッズ農園」
2014 年度：「シリーズ～つくってたべよう！日本の加工食品～」
2015 年度：「地域で体験・親子で体験！ニッポンの手仕事」

●プログラムについて

東苗穂児童会館では、2012 年度から 2015 年度までいずれも農園を中心にしたプログラムを実施しました。
札幌市では、畑を持っている児童館が多く、農園活動がとても身近です。例えば、円山動物園の敷地内の畑で子どもたちが動物の餌にするために野菜を作るプロジェクトなどがあります。東苗穂児童会館の農園プログラムは NPO どんどこプロジェクトに参加する以前からあり、それをクラブ化して活動してきたという経緯があります。

●協働 NPO について

2012 年度から 2014 年度のプログラム実施にあたっては、「人まち育て I&I」という NPO に協力をお願いしました。今回のプロジェクトはこちらからいきなり電話で持ちかけるような形になりましたが、プロジェクトの趣旨を理解してくださり快く引き受けてくれました。

●2012～2013 年度の農園プログラムと「体感」

2012 年度と 2013 年度は「東苗穂キッズ農園」という農園プログラムを実施しました。
このプログラムは、多種多様な作物を児童館の庭の畑に植え、収穫し食べるという喜びを共有することが主目的でした。また、地域に開かれた施設にしていきたい思いから、「人まち育て I&I」の展開していた「コミュニティガーデン」（市民が主体となって、造成から維持管理まですべての過程を自主的な活動によって支える取り組み）のコンセプトを学び、それを展開していきました。「人まち育て I&I」からは農業技術のアドバイスはもとより、**地域との関係作りについての効果的なアドバイス**をいただきました。2012 年度はグループホームの方を児童館に招いてプログラムを実施していましたが、そのスタイルではやや広がりが少ないと感じ、2013 年度は近隣のナナカマド公園やグループホームに出かけるという形をとりました。
また、2013 年度には「人まち育て I&I」から提案され、「ラーニングガーデンプログラム」を取り入れました。これは、アメリカで実施されている「畑の中で学習する」というプログラムです。2013 年度に実施したラーニングガーデンプログラム「種の自家採取」は、これまでの「収穫したらおわり」というプログラムではなく、「種が苗になり野菜に育っていく、そしてまた種ができる」という循環を、子どもたちが当たり前のこととして体感できたことが大きかったと思います。収穫は特別なイベントとして行われることが多いですが、特別な行為でなく**「循環の中のひとつである」ということを理解することにつながった**のではないでしょうか。

農園活動の中では、子どもからの「青いトマトも採取していいか」という質問に逐一答えるのをやめて、「採取したかったらしていいよ」と指導しました。実際に青いトマトを食べて「すっぱい」とか「苦い」というのを味わってもらって、どういう色のトマトがおいしいかを体感してもらいました。このように、農園プログラムは、子どもたちの「体感」を引き出すのに効果的だったと思います。

●2014～2015 年度の「冬」プログラムについて

2014～2015 年度は、畑を使えない期間の冬のプログラムを考えました。

2014 年度は「シリーズ～つくってたべよう！ 日本の加工食品～」と題して、農園活動で収穫した作物を材料として、加工食品（たくあん・味噌・納豆・豆腐）をつくることにチャレンジしました。

プログラムは、それぞれの食品の由来や種類、微生物の働きを加工食品づくりに役立ててきた先人の知恵を知る機会にもなりました。また、このプログラムでは、区内の食生活改善推進員協議会や天使大学の協力で、人の広がりがありました。特に、天使大学の栄養学専攻の学生たちが、子どもたちに栄養のことを話してくれたり、グループに 1 名入って共に活動してくれたり、非常に協力的でした。栄養士・教員を目指し、「子どもとのふれあい」の機会を得たいと思っている学生たちなので、この**プログラムは児童館と学生の両者にとってメリットになったと思います**。

2015 年度は「地域で体験・親子で体験！ニッポンの手仕事」と題して、農園で収穫した稲わらを材料に「しめ縄づくり」、農園で収穫した大豆を材料に「みそづくり」を実施しました。しめ縄づくりは、親子プログラムにしたのですが、保護者にとってもしめ縄づくりははじめての経験で、「児童館はこんなこともできるんだ」と知っていただけたようです。また、別のプログラムで豆腐を作ったとき、子どもから「これはいつ持って帰れるの？」と質問されて気がついたのですが、**「食品は待つもの、時間のかかるもの」**ということを子どもたちが学んでくれたのだと感じました。

これらの冬のプログラムを通じて、納豆も味噌も作ってすぐに食べられるものではないことを体感したようです。

●子どもたちの変化

プログラムに何度も参加している子どももおり、高学年の子が低学年の子の面倒をみる場面が出てきました。収穫のタイミングも子ども同士で相談してもらうなど、子どもの主体性を引き出す工夫をしています。単に作物を育て収穫するだけではなく、「地域に出たこと」「ラーニングガーデンプログラム」が楽しかったという声が増え、児童館と NPO が意図してきたことが子どもたちに伝わっていると感じています。

●NPO と協働して感じたこと

「人まち育て I&I」は菜園活動などの専門家で、種についても知識豊富でした。専門家と協働することは、単独でプログラムを実施するのとは全く違うのだとわかりました。2015 年の「エコビレッジライフ体験塾」は子どもたちに「食品は人間が作るのでなく微生物が作るのだ」という教え方をしてくれましたが、この発想なども専門家の方ならではものだと感じました。

最初は、NPO に対して漠然としたイメージしかありませんでしたが、プログラムを実施後は**「こちらのネジを巻いてくれる役割」をしてくれる団体**だと感じるようになりました。今は、**地域とつながるアイデアをどんどん出してくれて、児童館がやろうとしていることを一緒に具体化してくれる頼りがいのある存在**です。また、NPO は専門知識も技術もありますが、活動場所がないケースもあり、子どもとのつながりがないところも多いです。児童館は、活動の場所・ベースがあり、子どもとつながれるので、**お互いを補い合いながら、強みを併せることができる**と思います。

●今後について

最近、児童館のまわりの人の往来が増えました。通りから畑がすぐ見えるので子どもの活動がよく見えるし、お互いに挨拶をしています。今後はもっと多様な人を巻き込みたいと思っています。

また、プログラムに子どもの主体的な意見を反映させたいと思います。畑の作付け計画や、種を苗に育てる過程についても子どもに任せてみたいし、活動経過をまとめさせて成果発表もやらせたいというプランもあります。

目標は**「畑を通して地域とつながること」**。畑での活動自体は本来の目標ではなく、「地域とつながること」をもっともっとめざしたいと思います。

「作物の育ち」と「人の育ち」が目前にあることの価値

児童健全育成推進財団　　阿南健太郎

東苗穂児童会館では、複数年に亘って NPO どんどこプロジェクトに参加し、「育ち」を感じさせる取り組みが実践されている。取り組んできたテーマは一貫して“キッズ農園”。児童館の庭を活用して農作物を栽培し、収穫のよろこびを子どもたちや地域住民とシェアすることが根底にある。児童会館の子どもたちは日々、館の窓を開ければ、作物の成長に触れることができる。この近接距離に生き物の育ちがあるというのは、子どもの発達にとって好影響があると思われる。どんどこプロジェクトに取り組む前から農園活動の実践があったが、NPO の植物に関する深い造詣や菜園活動の専門性により、子どもの成功体験（収穫量や作物種数の増加）を深めることができている。

複数年に亘るプロジェクトは時にマンネリ化してしまうが、同館では“どんどこらしく”発展していることが見て取れる。栽培した野菜の種を自家採取し、次の年の種まきに使う。その種自体を学ぶために多種多様な作物の種を準備し、子どもたちに触れてもらい、生き物の知恵や不思議を体感してもらう。育てた苗は館から飛び出し、地域の公園に植えられる。作物をその場で調理して食べるだけではなく、加工食品にしてみる。活動プロセスの中に高齢者グループホームとの交流も交える。等々、プログラムの育ちがある。

インタビューの中で、館長が「外とつながることが怖くなくなった」という発言があった。NPO に緊張しながら、飛び込みで依頼し、共に探り合いながらの協働だったのではないだろうか。しかし、人が繋がりはじめ、なおかつ目の前にある子どもや作物の命が輝いていくことを肌感覚で感じたことから、「どんどこ」広げようという意欲にもつながったのではないだろうか。児童館職員の「育ち」もあるプログラムである。

地域に何気なく存在するだけでは、児童館は地域とつながれない。他のどんどこプロジェクト実施館でも良くあることだが、NPO との化学反応で生まれてきたプログラムが、地域の人を惹きつけている。東苗穂児童会館の農園は道路から見える位置にある。さらに、高い柵や垣根がない。このロケーションとプログラムは、地域を元気に育んでいく可能性がある。

■ 児童館インタビュー②【新潟県燕市・小中川児童館】

どんどこは、児童館の枠を超えられる『玉手箱』

お話：小中川児童館　大橋美樹さん

【採択プログラム】 **2012 年度：「避難所生活を体験しよう！」　2013 年度：「避難所生活を体験しよう！VOL.2」** **2014 年度：「収穫祭」**

●どんどこプロジェクト応募への思い

小中川児童館の前身は放課後児童クラブでした。クラブを運営する中で、利用児童たちが抱える多様な問題に児童クラブだけでは対処しきれず、限界を感じていました。2009 年に児童館を創設することになり、従来の放課後児童クラブの子どもたちだけではなく、もっと多くの子どもたちを巻き込むことができ、地域と関わることができるのではないかと期待を持ちました。ちょうどそのような時期にどんどこプロジェクトのお誘いがありました。（注：2009 年は公募事業ではなく、モデル事業として実施していた時期です。）

●新潟県燕市の地域性

新潟県では、新潟県中越地震（2004 年）、新潟県中越沖地震（2007 年）と大地震が続き、豪雨災害も頻発しています。災害を「身近に感じる」「常に考える」、というのが地域に住む方々の意識です。
燕市の小中川地区は、大農家、金属加工の自営業者、県営・市営住宅に住む方々が混在しています。

●2012 年度「避難所生活を体験しよう！」2013 年度「避難所生活を体験しよう！VOL.2」

2012 年度と 2013 年度は 2 年連続で避難所生活をテーマとしたプログラムを実施しました。

2012 年度は「被災場所から避難所まで歩く訓練」と「避難所生活での訓練」を組み合わせたプログラムを企画しました。
児童館を「福祉避難所」（介護の必要な高齢者や障害者など一般の避難所では生活に支障を来す人に対して、ケアが行われる避難所）として使う設定で訓練を行いました。外国人、足の不自由な人、妊婦さんなど、「災害弱者」に焦点を当てたので、「児童館が避難所である」ということだけではなく、「弱者が避難所でいかに大変か」「弱者に優しい避難所運営とはどういうものか」ということを地域の方に知っていただくことができたと思います。
児童館からは、「子どもたちが求めていることは『冒険』である」ということを投げかけ、協働 NPO（にいがた災害ボランティアネットワーク）はそれを避難訓練に結び付けるアイデア（ロールプレイングゲーム風の脚本）を出してもらい、お互いの知恵を出し合いながら進めていきました。それはまさに「協働」の作業であり、関わった行政の職員にも NPO の力量を知っていただくことができました。
2013 年度も避難所体験のプログラムでした。子どもたちの前年度の体験をもとに、「地域で困っている人にも実際に避難していただく」というプログラムを盛り込むことになりました。この年度は、子どもたちが一つのプログラムを体験すると、その体験を通じて物の見方が変わることに驚かされました。

また、自分からは何か積極的に行動はしないけれど「子どもたちと関わりたい」と思いながら「待っている」大人たちがこの地域にいるという新しい発見がありました。「食」をテーマに盛り込んで、近所の人から野菜など食材をいただいたのですが、子どもが調達係になり近所の農家に声がけすると、たくさんの食材を分けてくれ、「子どもたちと関われて生きがいを感じた」「子どもが育っていくのを見るのは楽しみ」との言葉をいただきました。NPO どんどこプロジェクトは、まさにそういう人を巻き込むのにとてもいいきっかけとなります。地域には他にも「何かをしたい」と「スタンバイ」している人がいるはずなのです。これからもそういう人を巻き込む仕掛けをしたいと思います。

●2014 年度「収穫祭」

2014 年度は「収穫祭」をやることになりました。

児童館の畑で子どもが大根作りを行ったのですが、大根作りはかなり困難でなかなか思うように育ちませんでした。しかし、児童館の畑は外の通行人からよく見える位置にあったので、地域の方が「大根はきちんと育っているの？もっと工夫したらどう？」と心配して、日々、様子を見に来てくれるようになりました。こうした地域の人の「大根見守り隊」がそのまま「子ども見守り隊」の役割を果たすような形となりました。児童館が、地域の人が当たり前に立ち寄り、地域の人が当たり前にその場所にいる空間となったのです。収穫祭には、家族で参加してくれて、児童館のイベントにはなかなか参加していただけず、接点を作りづらかった父親も巻き込めるようになりました。

●子どもたちの変化

子どもたちは、大人にはないような発想力を持っています。プログラムごとに子どもを成長させる仕掛けがあり、その都度、子どもは成長していくのだと感じます。

また、児童館は、学校と異なり、異学年の交流から生まれるパワーがあります。NPO どんどこプロジェクトは、まさにそのパワーを生かして行われるものだという実感があります。

子どもにはやんちゃなタイプも多いのですが、プロジェクトには真剣に取り組んでいました。どんな子どもも「人の役に立っている」「いいことをしている」という思いを持ちたいということが、プロジェクトを通じてわかりました。「今度『どんどこ』やるよ」と言うだけで、来てくれる卒会生もいます。「どんどこ」というキーワードが定着しているのを感じます。

●児童館側から見た NPO のイメージとどんどこプロジェクトの良さ

NPO の方々は児童館にはない技術や経験を持っているのでとても助かります。また、NPO はミッションに向かって活動するので、「突き抜けた人」「パワーのある人」が多く刺激にもなります。NPO の取り組みの中には未知の分野が多く多様な NPO とタイアップするということは、いい化学変化を生むし、どのような結果が出てくるのかわからない面白さはまさに「玉手箱」といえます。当初、こちらが想定していたプログラムとは異なり、思いがけない方

向に進んでいくことになるのが本当に面白く感じますし、ワクワクとドキドキが多く、いい意味で「タガ」や「ワク」が外れて、「児童館はこういうものだ」という思い込みを超えられるような気がします。

児童館の創設当時、子どもを「見守ってくれる大人」「気にかけてくれる大人」を増やしたいという目標がありました。どんどこプロジェクトは、急速に地域の結びつきをうみ、この目標を達成しつつあります。それは当初想像していた以上のスピード感でした。ゆっくり進めていては、すぐに成長する子どもに対応できません。「今、ここにいる子ども」のために、スピード感を持って対応することが非常に大切だと思うのです。
また、どんどこのプログラムの成功等により、市がまちづくり協議会の地域の区分け方法を変えたこともありました。思わぬ方向に影響を与えることに驚きました。
今後も、NPO どんどこプロジェクトで得た経験を生かして、地域に根ざした児童館をめざしたいと思っています。

主体をつなぐ「どんどこ」という共通言語

日本 NPO センター　吉田建治

NPO どんどこプロジェクトは 2007 年から 2010 年まで、モデル事業として事務局が地域を指定し、児童館とコーディネーターを個別に調整しながら実施してきた。この時代の経験を経て、現在の公募型助成事業に転換している。小中川児童館はモデル時代からの取り組みである。それまで県庁所在地の、しかも政令指定都市もしくは中核市で実施してきたが、燕市という地方都市でどのような形があり得るのか、事務局としてもチャレンジだった。地元に NPO が少ない中で、必然的にまちづくり協議会との関わりが深まったことは、小中川児童館でのプログラムを特徴づけている。
もう 1 つの特徴が、NPO どんどこプロジェクトに取り組んだ年が、まさに小中川児童館が児童館としての初年度であったこと。放課後児童クラブとしての経験は豊富で、プログラムを提供するという意味においては、厚生員のみなさんはワクワクさせるだけの個性と高い専門性を持っていた。しかし、自分たちでいろいろなプログラムができるがために、地域に課題を開き、協働で事業を実施していくことを肌感覚で理解することには苦労されたのではないだろうか。
NPO との対話を重ねる中で、あるとき「“地域”という言葉の捉え方が違うことで、話がすれ違っている」ことを「発見」した。関係者が議論を重ね、ぶつかり合いながら、共通言語を獲得してきたことで、これだけの広がりが生まれたのだろう。
毎年の企画会議において「どんどこだから、もう一歩こだわろう」という言葉が頻繁に出ると聞いた。「どんどこだから」より広い地域の人に協力を呼びかけることができ、「どんどこだから」卒業生もまた遊びに来てくれる。その背景には、全国のいろいろな関係者から見られているという意識があり、自分たちも他のどんどこの事例を強く意識されている。
小中川児童館は地域の人たちとの対話を通して、内外に共通する言葉を 1 つ 1 つ獲得してきた。まだ歴史の浅い児童館ではあるが、既に地域の拠点として柔軟に地域内外のいろいろなものをつなげる存在になっている。

■ 児童館インタビュー③【京都府京都市・修徳児童館】

「どんどこ」やったら、みんなが「どんどこ」やってきた！

お話：修徳児童館　木戸玲子さん

【採択プログラム】
2013 年度：
「こどもまちづくりいいんかい『おとなもこどももみんなで防災。ちょっと野外でおいしい体験』」
2014 年度：
「こどもまちづくりいいんかい『サンタさんへおくる手紙』」
2015 年度：
「こどもまちづくりいいんかい『こどもだって、こどもだから、こども 松原通（みち）の駅』」

●地域について
修徳学区は、平安時代から鎌倉時代にかけて政治の中心の位置を占め、今でも、関白九条兼実をめぐる人々の歴史的な史跡、例えば藤原俊成、法然・親鸞、九条兼実の政敵であった源通親の祖先（源氏物語に出てくる夕顔の逸話のモデルとされた具平親王）を感じ取ることのできる史跡や場所がいくつかある地域です。住民のみなさんはその歴史と文化を誇りにしています。
ハード面では「まちづくり委員会」で町並み保存のためのケヤキ製のプレートを作って景観保全に取り組む活動をしたり、ソフト面では防災防犯に力を入れたりしています。地域内に新築されるワンルームマンションについて、住民側がファミリー層向けのフロアも設けるよう要望するくらい、“子どもが住めるまちづくりを”というのが住民の考え方の根幹にあり、まち全体が、「子どものいるまち」を意識しています。
一方で、昔は活気のあった松原通りは、商店街の店舗数が激減し少しさびしい雰囲気になっています。

●どんどこプロジェクトに応募した動機
世の中にはさまざまな助成金があります。助成金というのは、単に「お金がいただける」のではなく、その時代に「必要とされていること」「求められていること」を支援する制度です。私たちは、どんどこプロジェクトに応募するとき、児童館に何が必要とされ求められているのか…ということを考えつつ反応していきたいという思いがありました。

●プロジェクトに参加するにあたって
私たち児童館は、「今後やりたいこと」が明確でした。「大人が作った空間に子どもたちがいる」のではなく**「子どもたちが主体的に空間を使うべき」**であると考えていました。また、防災においては子どもが自身の安全を守る力を身につけてほしいと感じていました。東日本大震災では、子どもが自分を守るだけでなく、「大人を助けた」という事例があり、**子どもには助ける側としての力も身につけてほしい**と思っていました。そして地域の方々にも、子どもたちが持つ力を理解してもらい、これからのまちづくりに子どもの視点を取り入れてもらえればと考えました。

●2013 年度のプログラムについて
2013 年度は、「こどもまちづくりいいんかい『おとなもこどももみんなで防災。ちょっと野外でおいしい体験』」というプログラムに取り組みました。

子どもたちが地図を片手に、道中にある消火栓や防火水バケツの数を数えたりして歩きます。防災の意識を高めてもらい、かつ、京都の昔ながらの町並みや仕事にふれて、地域の大人が守りすすめる「まちづくり」の一端を感じ取ってもらう企画でした。まち歩きの最後は、商店街でピザの材料のお買い物をして、最後はみんなで作って食べるというお楽しみも用意しました。

事前準備として職員がもっと地域や地域の人の暮らしを知るために、それぞれが児童館中心に5つのまちめぐりコースを作りました。職員が外を出歩き、たくさんの方々とプロジェクトについてお話ししたことで地域の方々が子どもや児童館を暮らしの中で意識してもらうきっかけにもなりました。協働 NPO である一般財団法人 Positive Earth Natures School は、ウォークラリー後のピザ作りを担当してくれました。「NPO」と聞くと、「近いような、遠いような」という漠然としたイメージを持っていましたが、話し合いをするうちに彼らの活動の趣旨を理解でき、「得意分野を持つ人たち」というイメージに変わり、頼れる存在となりました。

当日は、「わからないことはまちの人に聞くこと」と子どもたちに伝えておき、まちに住む大人と交流を深めながらのまち歩きとなりました。このプログラムのことを知らない家を訪問するなどのハプニング(！)もありながら、楽しんでまち歩きができました。ダンボール箱の窯で作ったピザは大好評でした。

●みんながどんどこやってきた！

このプログラムの後、地域の方々が「児童館」を意識してくれるようになりました。それまで「子ども」「子育て」というキーワードだと「学校」だったのに、「児童館」をイメージしてもらえるようになりました。「学校に加えて児童館」というよりは、「学校では対応できないようなことを児童館に頼む」という受け皿のような存在になっていきました。地域の方々の気持ちに大きな変化が起きたのだと思います。例えば、「子どもと接したい」と考えている大学生やアーティストたちが相談に来るようになりました。その方々に 2014 年度のどんどこプロジェクトを一緒にやらないかと声がけをしたことで次の年の企画が進みました。

●2014 年度のプログラムについて

「こどもまちづくりいいんかい『サンタさんへおくる手紙』」と題して、地元の劇団のシナリオをもとに、子どもたちが実際に地域を歩き、地域を支えているいろいろな人と出会う仕掛けづくりをしました。

シナリオを作成したり、まち歩きの前にワークショップをしてくれたのは特定非営利活動法人フリンジシアタープロジェクトという地域に根ざした劇団です。集団の子どもたちと接する児童館では丁寧に一人ひとりと対応できない面がありますが、劇団の方は一人ひとりの個性を見出して、個性的な表現を伸ばしてくれました。周りとは違う動きをするような子どもたちをも叱らず「個性」のひとつとして大切にとらえてくれました。NPO が児童館のできない部分を補ってくれたのです。フリンジシアターの方たちは、子ども専門の NPO ではないですが、活動の中で子どもたちと接する機会をもっと増やしたいと考えていたようです。このような子どものことを専門的にやっていない NPO ともつながるきっかけを与えてくれるのは、どんどこプロジェクトの良さの一つかもしれません。

●2015 年度のプログラムについて

松原通界隈活性化活動プロジェクト委員会と一緒に、松原通り一帯で行われた「松原通(みち)の駅」というイベントに参画しました。「こどもまちづくりいいんかい『こどもだって、こどもだから、こども 松原通(みち)の駅』」と題して、松原通りに面した事業所等のガレージを借用し、ブースを出しました。ガレージを借用する際の交渉を通して、これまでと異なるまちの人々に児童館を知ってもらうことができました。

特に印象に残っているのは「ラキュー職人」のブースでした。いつもは児童館で黙々とラキュー（※）をしている子どもたちが「職人」として、通りを歩く人たちにラキューを教える機会を与えられ、活躍する場となりました。また、「職人」という肩書きを与えることで、周りの子どもたちも彼らに対しあこがれや尊敬の気持ちを持ち、仲間の違う一面を見る機会にもつながりました。一人ひとりの子どもの居場所づくりという面では、大成功だったと思います。また、高学年の子どもたちは松原通りの歴史を学び、地域の方々にインタビューをし、「松原通の駅」を PR する VTR を作ってインターネットテレビ「下京ねっと TV」で放映しました。この取り組みがきっかけとなり、「松原通の駅」終了後、松原通界隈活性化活動プロジェクト委員会からのリクエストで、「松原コドモ未来カイギ」を開催。これからのまちづくりに子どもたちからの意見を聞く取組まで発展しました。

（※）ラキュー：小さなパーツから平面・立体・球体とあらゆる形に変化する、パズルブロックのこと。

●どんどこプロジェクトに思うこと

初年度にコーディネーターの方が何度も足を運んで段階的に話を聞いてくれ、ハードルを高くせずにアドバイスをしてくれました。また、京都にはいろんな市民活動団体が存在していて、非常にめぐまれていると感じました。
地域によっては、団体が少なく団体とつながるイメージ自体が持ちづらいことがあるかもしれません。そういった地域にこそ、コーディネートが必要で、専門的な方が仲介に入る意義が高いと思います。
また、児童館には中学生も来ます。家庭や学校で大きな問題を抱えている生徒も多く、彼らにこそ居場所やつながり、寄り添いが必要です。今後は、こういう中学生を巻き込んだ児童館のイベントも考えていけたらと思います。

ブレない目的意識と、「楽しさ」というスパイス

ふくおか NPO センター　古賀桃子

修徳児童館の取り組みは、長らく次世代育成を重視してきた地域性を背景に、初年度の早い段階から NPO 支援センターのサポートから離れて地域のさまざまな組織が参画する流れとなっている点で、NPO どんどこプロジェクトの中でもきわめて珍しいケースである。
３カ年とも、ＮＰＯ等の外部組織のかかわりは部分的であり、むしろ地域の各種団体と児童館との協働のプロセスの中で、NPO 等の新たな組織や人とのつながりが生まれてきている。そしてそのつながりから、助成対象である個々の取り組みが派生しているとみられ、「NPO との協働を通じて、地域ぐるみで次世代育成の環境整備を図る」という当プロジェクトの想定とは真逆となっている。加えて、異なる複数の組織間での協働事業の場合、調整が難しくなることも少なくないが、修徳児童館は「子どものために」との考え方が首尾一貫しているため、役割分担はおのずと明確になる上、何かと判断もしやすい。
一見、スムーズに完成形が仕上がっていったように映るが、実は初年度の企画段階での、きょうと NPO センターのサポートが大いに活きているとみている。同センターの平尾氏が、防災の取り組みについて児童館から相談を受けた際、「楽しさ」を加味するよう助言をされている。おそらくこのアドバイスがなかったら、防災イベントのみで終始して、ここまでさまざまな主体との関係が増幅するまでに到っていなかったのではないだろうか。インタビュー時の館長の「児童館の厚生員たちが自ら地域に出向くようになったのが嬉しかった」という言葉に象徴されるように、児童館スタッフを含む大人たちの主体性を生んだのも、「楽しさ」も伴った初年度の成功体験があってこそだろう。
今や修徳児童館では、子どもたちがさまざまな組織や人（住民、学生）の媒介役となっており、地域の力を引き出すほどまでになっている。ブレない目的意識とともに、スパイスが効いた企画力の大切さを改めて学ばされた。

■ 児童館インタビュー④　【福岡県北九州市・複数の児童館】

「面白い」から始めよう！

お話：南小倉児童館　三嶋涼子さん
中島児童館　三重野恭子さん
菅生児童館　差形尚江さん
特定非営利活動法人　KID’s work　大久保大助さん（協働 NPO）

【採択プログラム】
2011 年度：「小倉の町で忍者ごっこ」
2012 年度：「じどうかんコマーシャル～この番組はじどうかんの提供でお送りします～」
2013 年度：「商店街でおばけやしき～スズコを探して・・・」
2014 年度：「こども印刷部」　　2015 年度：「水探求部」
【実施児童館】
2011 年ー到津児童館、三郎丸児童館、中島児童館、長浜児童館、南小倉児童館、南曽根児童館
2012 年ー到津児童館、小嶺児童館、三郎丸児童館、中島児童館、南小倉児童館、南曽根児童館
2013 年ー黒崎児童館、小嶺児童館、山王児童館、菅生児童館、中島児童館、南小倉児童館、南曽根児童館　2014 年ー小嶺児童館・菅生児童館・中島児童館・中原児童館・南曽根児童館・南小倉児童館・山王児童館　2015 年ー小嶺児童館・山王児童館・菅生児童館・中島児童館・南小倉児童館・南曽根児童館）

●プログラムのアイデアについて

北九州市は、複数の児童館合同でどんどこプロジェクトに応募しています。2011 年度は「忍者ごっこ」（本ブック 27 頁参照）、2012 年度は「じどうかんコマーシャル」、2013 年度は「おばけやしき」、2014 年度は「印刷部」、2015 年度は「水探求部」と、毎年度、複数の児童館職員が集まって楽しいプログラムを考えています。形式ばった会議よりも、ワイワイとおしゃべりする中で面白いアイデアが生まれることが多く、「これをしたら面白いんじゃない？」「じゃあ、他にこんなことをしたら？」とアイデアがどんどん膨らんでいきます。

●2012 年度「じどうかんコマーシャル～この番組はじどうかんの提供でお送りします～」

2012 年から児童館職員同士でメーリングリストを使い始めて、お互いに連絡がしやすくなりました。他の児童館が何をどのくらい進めているか進捗状況がわかり、競争意識が芽生えました。複数の児童館が合同で進めていく良さの一つです。
このプログラムは CM づくりのプログラムを受けた児童館職員が「ぜひ子どもたちとやってみたい！」と提案したことから始まりました。話し合ううちに、それぞれの児童館を紹介する CM を作れば面白いのではないかということになりました。

職員同士で話し合うときは、**「大きな流れ・コンセプト」→「期限とゴールを確認」→「各館はその中で自由にプログラムの内容を決める」**という流れをいつもおさえています。「ゴール」は、「イベント後に今の子どもの状況がどういう状態になっているか、イメージをしっかり立てる」ということです。
子どもたちが作った CM は、どれも個性的で、複数館でやる面白さを感じました。

●2013 年度「商店街でおばけやしき～スズコを探して…」
以前からおばけやしきの取り組みがありましたが、「複数の児童館でアイデアを持ち寄り、それぞれの得意分野を生かしておばけやしきを作ればもっと面白くなるのでは？」という話になり、2013 年度の企画として決まりました。

内容は、単におばけやしきを作るだけではなく、ちゃんと人を怖がらせること。まず、子どもたちに**「そもそも“怖い”ってどういうこと？」**について話し合ってもらいました。そして、そこから**「観客を楽しませるにはどうすればいいか」**を考えてもらい、プロ意識につなげました。
演技指導は、地元の劇団「大猫座」の方にお願いしました。
子どもたちはセリフを自分のことばで置き換えて役になりきったり、感情をより相手に伝える表現を学んだりして、すっかりストーリーに入り込むことができたようでした。
複数の児童館での取り組みでしたので、制作物やゾーンを各館に振り分けました。それぞれの児童館が工夫を凝らし、とても完成度が高かったです。
特におばけやしき入り口の導入部分での動画を担当した南曽根児童館は、前年の CM づくりのノウハウも生かしていました。本番は、「みんなで観客をだます・はめる、一人でも笑ったらだめ」という空気の中、子どもたちは普段では考えられない集中力と緊張感を保ちました。これは、このプログラム期間のみで培われたものというよりは、**児童館の長年の取り組みの積み上げが下地にあり、NPO が関わることで引き出されたものである**と感じました。

●2014 年度「こども印刷部」
前年度の「おばけやしき」のチラシの出来がとてもよかった、という話になり、このアイデアにつながりました。
プログラムは、「印刷会社で技術を学ぶ」「自分の名刺をつくる」「営業方法を勉強する」「地域の商店街を歩く」「商店の経営者から何に困りどうしていきたいか（売りたい商品のリサーチなど）をインタビューする」「その注文に答える」という一連の流れで構成しました。
今回は印刷技術を学ぶだけでなく、**「自分の住む町を知り、仕事を知る」ことにつなげました**。商店街の酒店に飛び込み営業をした時は「児童館はこんなことまでやっているんですね」と驚かれました。
また、「チラシまつり」を開催し、各館が活動報告会をしたあと「チラシ作り選手権」を行いました。少し失敗してポスターやチラシ作成を思いどおりにはできなかった児童館もありましたが、他の児童館の成功を見て刺激を受けたようで、その児童館の子どもたちにとっていい経験だったと思います。

●2015 年度「水探求部」

2015 年度は、環境問題を抱えてきた北九州市ならではの取り組みをすることになりました。児童館には水を出しっぱなしにする子どもがいて、水の大切さを教えたいと思っていたところでした。机上の学習ではなく、**目で見て、歩いて、そして形におとす作業で水の大切さを知ることが大切**だと考え、プログラムでは、浄水場見学のほか、地域の川付近の探検・調査を行い、巻き物や絵本にまとめる作業を行いました。

最後に出来上がった作品はどれも素晴らしいものでした。合同のプレゼンテーションには、多くの保護者が足を運んでくれました。また、子どもがプログラムを考え、積極的に取り組む姿に成長を感じました。子どもたちは水の大切さだけではなく、地域の環境の大切さも理解したようです。

複数の児童館で学区を越えて川について学ぶことができ、**学区を超えた交流や違う年齢の子どもの交流も生まれました**。また、歩いて調べる作業の中で出会う大人との交流もありました。

●子どもの変化

各プログラムでの子どもの様子でも触れたように、**自信・社会性・自主性・場慣れ**を身につけたように思います。NPO との協働に加えて、複数児童館の合同という刺激もあって、そういった力が養われたのではないでしょうか。

●児童館側から見た NPO

NPO は「まちづくりにおいて活躍している団体」というイメージが強く、「子どもと一緒に活動する団体」というイメージはありませんでした。

どんどこプロジェクトを通じて感じたのは、NPO の方は**「知らないことを教えてくれる人」**だということ。それは子どもだけでなく、大人にとっても同じです。たとえば、マンホールの絵についていろいろと教えてもらったのですが、それからは大人もマンホールを意識してまち歩きするようになりました。そして、NPO の方々は、**子どもへの教え方がうまい**と感じました。「おばけやしき」の時は、のこぎりやなたの使い方を大胆に、かつ気安い感じで教えていました。しかし、だからといって子どもたちの気を緩ませるのでなく、締めるときは締めて、**「メリハリ」をしっかり伝えていました**。そういう空気は子どもたちに伝わるのだと思いました。

●NPO から見た児童館（KID’s work　大久保さんより）

最近の世の中は、「面白い」よりも「安全」が優先されてしまう傾向にあります。**本来は「面白い」から始まって「安全」とのバランスをとっていくもの**ですが、どんどこプロジェクトを経験して、児童館の先生の意識がその本来の姿に変わっていたように思います。

児童館の先生とは、**「子どもの放課後時間をどうするか」を考える同志**として仲間意識があります。どんどこプロジェクトのあと、調査事業をともに行ったり、相談を受けたりする機会が増えました。

●今後について

今後もいろんなNPOとつながっていきたいです。そして、複数児童館の合同でこそ生まれるいい意味での競争心をもとに、さらなるレベルアップをはかっていきたいと思っています。そして、児童館同士のつながりをもとに様々な自主企画にもチャレンジしたいと思っています。

協働によるダイナミズム、ここにあり

ふくおかNPOセンター　古賀桃子

私は当プロジェクトが始動した2007年当初より、北九州市での協働事業をお手伝いしてきた。実情や本音も知り得る「中の人」同然の立場から見えてきた特徴は、「主体性のシフト」・「しくみへのインパクト」・「ひろがり」の３点である。

まず、「主体性のシフト」については、何より児童館側の主体性が出てきているということである。2007年度の事業開始当初はモデル事業（全国の６か所の児童館を指定）という形態であったため、児童館もその指定管理者（社会福祉法人）も、「東京から急に持ち掛けられた話」として受け止められているきらいがあった。しかし、年々、ＮＰＯの専門性が生きた楽しいプログラムを子どもたちとともにする中で、児童厚生員たちがいわば「ハマる」ようになり、年度を終える反省会で次年度の構想、しかも協働相手がすぐさま思い浮かばないほどに斬新なアイデアが出るほどにまでなっている。

「しくみへのインパクト」は、指定管理者において、複数の児童館による企画に対して補助金を支給する「グループ行事制度」が創設されたことである。児童館側にとっては、限られた財源の中、当プロジェクトの枠外でも協働事業が取り組みやすくなったことは大きな助けになっているようだ。また、指定管理者が主催する厚生員対象の研修会で当プロジェクトの協働先のＮＰＯ代表者が講師として招聘されたこともあった。

「ひろがり」については、プログラムや協働相手の多様化はもとより、ここ２～３年は地域の自治会等の関係者に積極的にアプローチして子どもたちとさまざまな地域資源を学ぶ機会を重要視したり、当プロジェクトに未だ参加していない多くの児童館に対して当プロジェクトの成果やプロセスの面白味を伝えることへの関心が高まっていたり等、数年重ねてきたからこその波及性が出てきていることだ。北九州市の児童館は、普段から館同士の情報交換や連携をよく取られている印象だが、その分、「他の児童館にも協働事業の醍醐味を理解してもらい、より多くの子どもたちに貴重な体験の機会を創出したい。」という、原点的で、新たな課題が浮上している。

■ どんどこの広がり～アンケート結果から～

日本 NPO センターでは、2015 年度のプログラム採択児童館 24 館を対象に「どんどこプロジェクト後にどのような変化があったか」についてアンケート調査を行い、18 児童館より回答を得ました。

① 来場者数の変化
② 報道などでの紹介
③ 外部へ広がった出来事

の順に調査結果をご報告します。

①来場者数の変化について教えてください。

「どんどこプロジェクトに初めて採択された年度の前年度」の来場者数と「2015 年度」の来場者数をお聞きしました。（例：採択年度が 2014 年度の場合、2013 年度と 2015 年度の来場者数、採択年度が 2015 年度の場合、2014 年度と 2015 年度の来場者数の比較となる）

次頁に示す「児童館来場者数（月平均）の変化について」の表は、各児童館の月平均の来場者数の増減を人数と%によって示しました。

「児童館来場者数（月平均）の変化について」 概要

・小学生の月平均の来場者数については、平均 149. 4 名、平均 15.8%の増加となった。
・中高生の月平均の来場者数については、平均 8.9 名、平均 13.2%の増加となった。

・中高生の月平均の来場者数が 1～2 名から二けた（13～20 名）に大幅増加した児童館が 3 館あった（D,I,P 館）。3 館とも継続プログラムを実施している児童館であり、幅広い年齢層の児童の来場が徐々に増えてきていることがうかがえる。

・C 館はもともと中高生の来場者数が多い児童館であったが、中学生が主体的に参加するプログラムを実施したことで、100 名以上の増加となった。

児童館来場者数（月平均）の変化について

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18		
児童館	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	合計	平均
PJ前年度（小学生）(名)	918.8	1081.6	1123.2	810.6	1167.0	1051.7	2082.4	502.9	19.9	1555.9	924.7	2208.2	489.0	312.6	395.9	401.6	1447.9	558.4	17052.2	947.3
2015年度（小学生）(名)	980.8	1714.6	1373.8	1099.0	1667.9	999.6	2151.1	628.1	36.3	1699.9	1283.8	2076.9	451.1	319.3	302.8	364.8	1815.3	777.2	19742.0	1096.8
人数の増減（名）	62.0	633.0	250.6	288.4	500.9	-52.1	68.7	125.2	16.4	144.0	359.1	-131.3	-37.9	6.7	-93.2	-36.8	367.3	218.8	2689.8	149.4
人数の増減（%）	6.7	58.5	22.3	35.6	42.9	-5.0	3.3	24.9	82.4	9.3	38.8	-5.9	-7.8	2.1	-23.5	-9.2	25.4	39.2		**15.8**
PJ前年度（中高生）	217.6	29.5	321.3	2.4	2.6	1.5	71.0	2.7	1.2	85.7	160.6	174.2	13.2	38.6	9.2	2.3	8.5	2.2	1141.8	67.2
2015年度（中高生）	185.0	122.5	431.2	20.6	0.8	2.1	85.3	6.3	13.6	50.0	156.5	152.1	7.7	30.0	5.2	14.0	9.9	0.0	1292.6	76.0
人数の増減（名）	-32.6	93.0	109.9	18.2	-1.8	0.6	14.3	3.7	12.4	-35.7	-4.1	-22.1	-5.5	-8.6	-4.0	11.7	1.4	-2.2	150.8	8.9
人数の増減（%）	-15.0	315.3	34.2	751.7	-71.0	38.9	20.1	137.5	1064.3	-41.6	-2.5	-12.7	-41.8	-22.2	-43.6	500.0	16.7	-100.0		**13.2**

※R児童館については、児童館業務を休止し放課後児童クラブのみでの運営となり、中高生の来館が出来なくなったので、合計に加えていない。

②どんどこプロジェクトに関連して、外部へ広がった出来事などがあれば教えてください。

○2013,2014 年のどんどこで、地域歩きを中心に商店街や自治連合会などとつながったことがきっかけで、松原通活性化プロジェクトの皆さんからのお声掛けがありました。協働している NPO 法人フリンジシアターの方を通して新たな地域団体とつながり、2015 年の活動は児童館を拠点にしていた活動から地域を拠点とした活動に発展しました。
2015 年の事業終了後は、まちづくりに子どもや子育て世代の保護者から意見を聞きたい、若い世代に自分たちの住む町に興味を持ち一緒に活動したいとの思いもあり、児童館の子どもや保護者に意見を聞く「松原コドモ未来カイギ」が開かれました。地域の大人が子どもをゲストに迎え、子どもたちの遠慮のない意見に笑いと元気をもらいながらカイギが終了しました。児童館で毎月開催している「あおぞらだがしや」にも今まで来たことがなかったという地域の方の参加もありました。2016 年度はさらに関わる店舗や団体が増えつつあります。（修徳児童館）

○児童館を拠点に、中学生が主体となった「避難訓練の実施」は地域住民の自主防災の意識を高め行政をも巻き込んだ活動が「自主防災組織」のモデルケースになり得る事例として、浦添市防災危機管理室長より総評をいただいた。また、この取り組みが議会でも評価を受けたことで、地域の自治会の視察訪問が続いた。
平成 27 年度「沖縄県児童館連絡協議会」にて実践報告することで、「児童館が拠点となった地域づくり」の取り組みの事例となり、「中学生が主体となった活動」は、他の児童館でも参考にしたい実践的な取り組みとして感銘をうけた。自治会がメディアに取り上げられる事も多くなった事で、自信をもって自治会運営に携わり、地域を引っ張って盛り上がりを見せた。（森の子児童センター）

○どんどこで繋がりを持ったNPOと協力して、地域の商店街で遊びの要素を取り入れた「商店街すごろく」（商店街探検）を実施したり、NPO主催の商店街イベントで子どもボランティアがゲームコーナーを運営して、参加するようになりました。2016 年度は、そのNPOの作業所で、障害者の方からお菓子作りを学び、商品の企画・開発・販売を一緒に行うプログラムを計画中です。商店街イベントについては、以前のどんどこ（2013 年度：商店街でお化け屋敷）からヒントを得て、地域に持ち帰ってアレンジしたものです。
どんどこに関わることで、アイデアも他団体や人との関係も、少しずつ広がっているのを実感しています。子どもたちの発想や着眼点の豊かさ、持っている力に驚かされます。
また、子どもたちの発表の場を！と、北九州市福祉事業団に働きかけをし、2016 年 6 月に「北九州市児童館長連絡協議会総会」で、山王児童館の子どもたちが発表させてもらえることになりました。
それから、児童健全育成推進財団季刊誌「じどうかん」夏号に、「子ども印刷部」（2014 年度）の記事を掲載予定で、現在、原稿を作成しているところです。（山王児童館）

○2015 年度に実施したハロウィン企画に対し、玉川学園町内会は、初回ということで、残念ながら様子見でした。しかし、次年度のことを考え、情報は逐一伝えていました。
当日の、町をあげての盛り上がりを見て、2016 年度は、「何らかの形で関わらなくてはいけない」と決定したと、会長から連絡がありました。これで、玉川学園地域の全住民の行事となります。2015 年度：共催（地区社協、玉川学園商店会、玉川学園南口商店会）協力（町五小 PTA 有志、子ども 110 番の家、玉川学園小さなギャラリー会）（玉川学園子どもクラブころころ児童館）

○老人クラブやボランティアグループへけん玉が広がり、子どもたちが技の披露や交流、指導者として各会に呼ばれることが出てきました。
元々児童館を通して地域と子どもたちの繋がりはありましたが、事業を行ったことにより、児童館外でも地域と子どもたちとの交流の場ができ、地域や子どもたちから喜びの言葉を頂きました。（キッズランド児童館）

○昨年度のどんどこで畑の事を中心に活動をしてきました。活動の内容等を、センターだよりで地域の方にお知らせしたり、秋には収穫祭を開催してたくさんの地域の方に参加していただいたことで、私たちの児童センターでの他の活動にも関心を示してくださるようになりました。地域のお年寄りの方も子どもたちの遊ぶ様子を見に来て下さったり、畑の事を教えに来てくれるようになりました。（ふたば児童館）

○町内の児童公園の花壇での花植え。近隣中学校のバスケ部員が畑の雪割り。近隣のグループホームとの交流（畑の苗植え、みそ作りなど）近隣大学、学生サークルとの連携（事業へのボランティア参加・大学構内の堆肥（落ち葉）の無償提供）。青少年育成委員会との連携（収穫祭稲刈りへの協力）。（東苗穂児童館）

○他館との立地状況の違い、災害が起きた時の対応がそれぞれ地域によって違う事が認識でき、小学生、中学生、高校生にとってもよい学習になったと思います。また、地域や関係団体の大人の協力もあり、防災意識の向上につながったのではないかと思います。（上浦児童館）

○当初予定していた紙芝居の発表の場（「絵本のひろば」「健康福祉まつり（まちセン共催）」「合同児童館まつり」以外に小学校や市内の老人ホームでも発表の機会がありました。老人ホームに入所中の方は真剣に紙芝居を鑑賞し、糸満の魚売りの名セリフ「イユコーンチョラニー」の場面ではそうだったと懐かしそうに相槌をうつ場面もみられました。これからも定期的に老人ホーム等と交流ができればと思います。
紙芝居をきっかけに市制 45 周年記念の冠事業として、児童館の子ども達を主役にしたオペレッタを上演することになり、現在その準備を進めているところです。（糸満がじゅまる児童センター）

糸満がじゅまるセンター・2015 年度プログラム「“みーかがん”の紙芝居をつくろう」

「絵本のひろば」での紙芝居発表

③どんどこプロジェクトに関連して、報道などで紹介されたことがあれば教えてください。

都道府県	児童館名	年月日	媒体	内容
北海道	東苗穂児童会館	2014年8月18日	NHK札幌放送局	夕方のローカルニュースで菜園活動で育てた緑のカーテンを中継
宮城県	荒町児童館	2016年3月1日	J-COM　デイリーニュース	サケ見送り隊
京都府	修徳児童館	2015年1月12日	京都新聞	松原通にぎわい復活
		2015年11月～現在	下京ねっとTV	ぼくたちわたしたちの松原通りみりょく発信！！
福岡県	中島児童館	2012年2月26日	朝日新聞	ちびっ子忍者　街探検でござる
		2012年3月2日～8日	J-COM	小倉の町で忍者ごっこ
福岡県	山王児童館		西日本新聞	商店街でお化け屋敷
			読売新聞・朝日新聞	イベント告知案内
鹿児島県	キッズランド児童館	2014年8月	内山田地区公民館だより	
		2015年9月	内山田地区公民館だより	
沖縄県	糸満がじゅまる児童センター	2015年11月2日	糸満市広報	「絵本のひろば」にたくさんの子どもたち、劇や読み聞かせに夢中
		2015年11月4日	まちセン＊糸満市市民活動支援ｾﾝﾀｰ	11/1絵本のひろばでオリジナル紙芝居を発表@糸満がじゅまる児童センター
		2016年1月23日	ＲＯＫ（ラジオ沖縄）	ＩＳＬＡＮＤ　ＴＯＤＡＹ　子ども会コーナー（制作した子ども達へのインタビュー）
沖縄県	森の子児童センター	2014年8月19日	ＯＣＮ沖縄ケーブルネットワーク	「防災講話～森の子児童センター」
		2015年2月1日	うらそえ社協だより	わたしのまちのイイとこ発見！！　神森中学校区　ボランティアサークル　（ＴＥＥＮ’Ｓ　ＣＬＵＢ）
		2015年4月7日	沖縄テレビ（株）	「みんなに優しい街」
		2015年7月30日	琉球新報	「避難路、夜間に検証」　浦添　神森中作成の福祉地図基に　来月防災講座で実践
		2015年8月21日	ＦＭ読谷	「おきこく発！socil Ｒａｄｉｏ」　中学生と大学生が動くと社会が動く
		2015年8月25日	沖縄テレビ（株）	「避難マップを検証」
		2015年8月31日	琉球新報	夜間の避難路　検証　浦添市勢理客　障がい者参加、声聴く
		2015年9月16日	沖縄タイムス	沖縄の防災　共に考える「神森中生・沖国大生ら体験し意見交換」
		2015年12月17日	沖縄テレビ	勢理客避難訓練！　「ニュースこの一年」
		2015年12月26日	琉球新報	400人参加し防災訓練　浦添・勢理客　中学生が呼びかけ
		2016年1月18日	教育新聞	児童館を核に地域づくり　子どもたちと大人が協働　住民挙げた避難訓練実現
		2016年1月29日	琉球新報　かふう	中学生が動くと、社会が動く
		2016年3月1日	風の便り	中学生が動けば社会が動く　浦添・森の子児童センターと生徒たちのプロジェクト①、②

ちびっ子忍者 街探検でござる

小倉北の歴史・文化学ぶイベント

忍者に扮した北九州市の小学生たち約60人が25日、同市小倉北区の小倉城や周辺の商店街などで地元の歴史や文化について学ぶ「修行」に取り組んだ。楽しく地域に触れて学んでもらおうと、「小倉の町で忍者ごっこ」と題し、市内の児童館が実施したイベントだ。

子どもたちは頭に風呂敷を巻き、ポリ袋を腰で縛って忍者に変身。「小倉の街を色々と調べてきてほしい」という先輩忍者の指令に、「はっ！」と元気よく返事をした。渡された地図を片手に街中を回り、明治時代の古いデザインの郵便ポストや地元名物のまんじゅう、橋に刻まれた模様などを探し出した。

市立中島小１年の紀井星奈さん（７）は「忍者になって、とても楽しかった。黒いポストも橋の模様も、みんな知らなかった」と笑顔だった。

小倉北区と小倉南区の６児童館が企画し、わいわいキッズいいづか（飯塚市）、北九州タウンツーリズム（北九州市小倉北区）の２ＮＰＯ法人が協力した。

朝日新聞 2012 年 2 月 26 日掲載

北九州市の児童館の 2011 年度プログラム「小倉の町で忍者ごっこ」が忍者に扮装した子どもたちのカラー写真とともに紹介されている。

忍者になって町を回ることで、今まで知らなかったポストや橋などを知ることができたという子どもの感想が掲載され、楽しみながら知識を深めた様子が伝わってくる。

松原通にぎわい復活を

プロジェクト委 17日に住民交流の場　商店街振興組合 児童向け催し

かつては祇園祭の山鉾巡行路で、市内きっての商店街としてにぎわった京都市下京区の松原通を盛り上げようと、地域住民たちがさまざまな活動を続けている。「松原通界隈活性化活動プロジェクト委員会」は17日に初めて「みんなの昼市&大人の夜市」と題したイベントを計画し、松原京極商店街振興組合は児童向けのイベントを企画する。両者は連携強化も模索する。

「みんなの昼市大人の夜市」のチラシのデザインを話し合う松原通界隈活性化活動プロジェクト委員会のメンバー（京都市下京区松原通烏丸西入ル・田中直染料店）

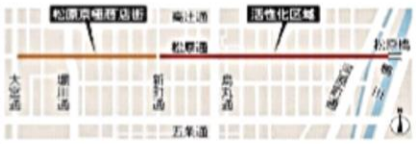
鴨川―堀川通間の7学区みたらし団子屋、空き家などの魅力を出し合った。その結果、松原通の店を再発見し、歴史などを語り合う機会をつくろうと企画されたのが、「昼市&夜市」だった。

会場は、松原通烏丸西入ルの田中直染料店ガレージで、17日正午～午後5時におでんや大原産の野菜などを販売するほか、染色体験などを催す。その後は18時まで松原通の店で購入した食品を持ち寄り、ざっくばらんに会話する空間を提供する。ガレージを貸し出す田中直輔さん（33）は「マンション住民と長年住んでいる人が知り合う機会もつくりたい」と話す。

一方、新町一条宮道間の商店でつくる松原京極商店街振興組合の井上昌明事長（33）は商店街を盛り上げるため、毎月3日に店でボサノバやジャズなど音楽ライブを開き、特色ある地域を盛り上げてきた。今後は徳修児童館と協力し、子ども向けのイベントを計画している。

さまざまな活性化策が模索されている松原通（京都市下京区）

活性化策 連携も模索



同組合に加盟する店舗は現在23軒。かつては約150軒の店が並び、夕方には荷車が通行止めになるほど繁盛したという。往時のにぎわいを取り戻したいとの思いは、プロジェクト委員会とも共通で、両者は連携も目指す。

今月6日には委員会が「昼市夜市」に向け、チラシのデザインを話し合った。昔、松原通の軒先に出店が並んでいた頃の話をし、「この企画も出店が出るほどになれば」と盛り上がった。

委員長の山田北太郎さん（64）は「今回は部分的な取り組みだが、活動を広げて松原通全体に浸透させていきたい。市を定期的に催し、商店街の商品も並べ、足を運ぶきっかけをつくりたい」と意気込む。井上さんも「商店街でできることがあれば」と協力する姿勢だ。

（能美孝啓）

きょうとアイ

京都新聞　2015 年 1 月 12 日掲載

京都・修徳児童館の 2014 年度プログラム後、児童館と商店街とのつながりが生まれた。記事では「子ども向けのイベント」の計画が紹介されている。2015 年度プログラム『こどもだって、こどもだから、こども 松原通（みち）の駅』の実施につながった。

被災地・復興過程地とつながり、学びと実践を伝える since 2011

風の便り vol.56 Girls 2015

2015.3 阪神淡路 20年・東日本5年を機に再発信　発行者＝沖縄ガールズ防災、NGO沖縄協働ネット、稲垣 暁（社会福祉士／防災士）

まちの防災を楽しむ女性の実践アーカイブス
Volante Le Vent Bosai!

防災訓練では最低限つぎの行動を！
①脱出路の確保
②とにかく玄関外へ
③１分で自宅脱出

中学生が動けば　社会が動く

浦添・森の子児童センターと生徒たちの地域プロジェクト ①

浦添市立森の子児童センター（大城喜江子館長）と中学生が、災害時の要援護者避難に力を発揮している。

「児童館は子供が使う場」という既成概念を覆し、地域の顔が集まる場、子供たちが大人との関わりで育つ場、社会活動で子供たちの潜在能力が引き出される場として機能した成果だ。

地域マップづくりなど１年半の取り組みで、中学生自身が必要性を感じて提案した防災訓練や地域全世帯への訓練チラシ配布企画が、全国でも例を見ない効果を生んだ。2015年12月13日に浦添市勢理客地区で行った避難訓練から、取り組みを考える。

中学生が地域と提案し実現した避難訓練で、地域を歩いてつながったおばあちゃんを避難誘導する神森中生。

福祉を学び、地域を知り、災害に備え、弱者支援へ

沖縄では異例ともいえる450人もの住民らが参加した避難 訓練では、中学生が要支援者の誘導やアンケート調査など動いた。だが、これらは彼らにとってたいした手柄ではない。この１年半、中学生は自ら地域を学び、災害と福祉を学び、まちを歩いて自分たちの住むまちが安全に暮らせる地域かどうか調べた。その結果、地域に防災訓練が必要であり、自分たちはまちに多くいる高齢者や障がい者など要援護者を「自分たちの手で逃がす」と決意したのだ。

９人の中学生で地区の２千世帯すべてをまわり、防災訓練への参加を訴えた。その際、各家庭で要援護者がいるかどうかを会話と目視で確認した。地域で把握している数と照合すると、中学生が見つけた要援護者の方が多く、社会福祉協議会で新たに支援対象として登録した。

避難訓練で中学生が誘導したのは、こうした自分たちの目で確認した要援護者だった。中学生に車イスを押されながらおばあちゃんはテレビのインタビューに答えた。「頼める人はヘルパーしかいないから、心強い」。

昼間も地域にいて、まちをよく知り、体力・創造力・機動力がある中学生が動くと、社会全体が動き出す。今回の森の子児童センターの取り組みをきっかけに、浦添市は地域防災の人材育成に力を入れ始めた。

（上）450人もの地域住民が、避難先の紙森小に集まった。
（下）アンケートも中学生が自分たちで考え、参加者に積極的に声をかけて記入してもらっていた。

神森中生９人　地区2000戸を訪ね要援護者理解

社会実践プロセス

浦添・森の子児童センターと生徒たちの地域プロジェクト（2014年４月～2016年３月）

プロジェクトの流れ　＊ⅠⅡⅢの期間は重複する

Ⅰ　キーパーソンとなる中学生の基礎づくり（６か月）…潜在力の引き出し、底上げ
① 「場のもつチカラ」児童センターの潜在力
…役割の可視化、再発見、地域の結集点（既成概念転換）
② 集まる子供たち、特に中学生の潜在力
③ それを引き出す、背中を押す、つなぐ大人の存在（児童センター、社協）
…地域を知る専門職
ただし、非正規雇用、ワーキングプアであることが問題

Ⅱ　学びから実践へのプロセスづくり（12か月）…中学生が地域住民を触発
① 学びと動機付け
声かけ→福祉を学ぶ→障がいを体験→マップづくり→安心して住めるまちとは？
② 調査・発見・記録・発信（マップ・ブック）
活動を通じた地域の巻き込み
…まちの魅力を知る大人、大学生や専門職との協働、要援護者
③ 理念づくり
…「自分たちが地域の災害弱者を守る」

Ⅲ　地域との協働づくり（12か月）…中学生の活動から地域活動へ、シフトアップ
① 地域の人が一緒にまちあるき・防災学習
② 障がい者が一緒に動く
…大学との協働で障がい学生がリード、地域の障がい者も動く
③ 中学生が「訓練」提案⇒地域のキーパーソンが何度も顔合わせ
…プロセスそのものが「防災実践」

モデル性

児童センター拠点に住民が何度も顔を合わせることで「子供」「地域」の課題共有、まちと命を守る意識へ

児童センターが拠点になり、子供が抱える課題（居場所、社会との関わり、貧困と食）と、地域が抱える課題（独居高齢者の増加、コミュニティでの関係が希薄、要援護者増加と支援者・地域リーダーの高齢者依存）をつなげ、それぞれが有機的に働きかけることで既存の地縁組織を再編成し、新しいコミュニティのあり方を見いだした点は、他に例を見ないだけでなく、地域防災が抱える課題への新しい向き合い方を示した。

厚生員の桃原弘子さんは、**中学生の潜在能力を引き出す「基礎グループ」づくりと、地域の課題に気付く機会づくり**から始めた。地域や仲間内での問題意識と役割意識を身に付けるプロセスだ。中学生が自分たちの方向性や価値観を理解し始めたころ、地域が抱えるテーマのひとつ「体が不自由な人をどう守るか」との接点を設けた。地域の人たちが安心して暮らせるマップを作ることになり、何を基準に安心とするかを話し合い、「防災」をテーマにした地図に決まった。

防災活動の持つ、①**平時見えにくい地域の課題を可視化できる**、②**中学生にとって「地域で起こりうる恐怖」は関心を持ちやすい**、③**そこにある危機を考えることで地域がつながりやすくなる**、という機能的を生かし、防災福祉の視点にシフトしていった。地域における弱者について知識と問題意識を持っていった中学生は、専門的な学習機会を経てさらに考えを深めていく。

桃原さんや大城館長らスタッフは、地域の大人と行動することで社会の考えかたやルールに接する機会を意図的に作った。マップづくりの地域調査では、福祉や防災・防犯だけでなく地域の文化についても初めて知る機会となり、そうした話をしてくれる大人とお互いに「顔を覚える」関係になっていく。知らない大人との作業を通し、①**地域には協力してくれる大人がいる**、②**そうした大人とのネットワークが地域活動に欠かせない**、③**仲間と協力しあうことで事業ができあがっていく**ことを理解し、ひとつひとつの作業での達成感が自信になっていった。

最初の防災学習会から１年後に行ったマップ検証では、「避難」に絞った事前学習を開催。「逃げられない人」「逃げない人」「逃げ切った人」事例を元に考えを整理した。作ったマップを手に障がいを持つ大学生と夜間に地域を歩き、マップだけでは安心は確保できないと考えた中学生は「自分たちが要援護者を確実に逃がす人になりたい」という強い思いを持つように。そして、ついに中学生から大人に「地域で防災訓練をしたい」と提案がなされていく。

＊次回は成果と背景、「子供」「地域」の潜在力を引き出す大人の存在の重要性について

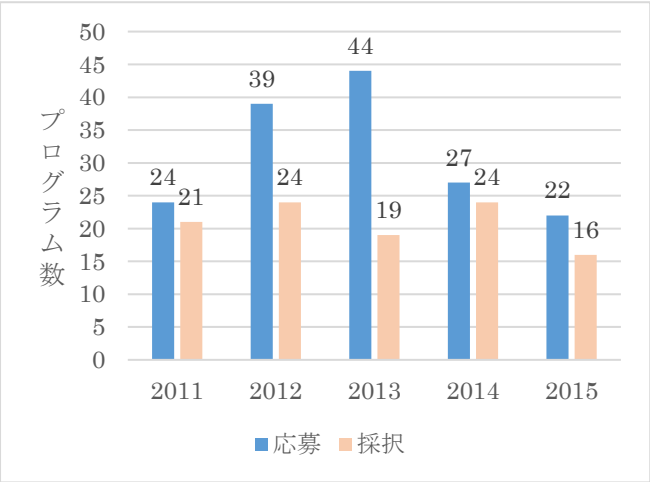
「風の便り」（「沖縄ガールズ防災、NGO 沖縄協働ネット、稲垣暁」発行）

2016 年 3 月 1 日掲載

森の子児童センターの 2015 年度プログラム「『防災避難訓練の実施』と地域連携交流学習」の当日の様子が紹介されている。「沖縄では異例ともいえる 450 人もの住民らが参加した避難訓練」と紹介され、「『児童館は子供が使う場』という既成概念を覆し、地域の顔が集まる場、子供たちが大人との関わりで育つ場、社会活動で子供たちの潜在能力が引き出される場として機能した成果」と児童館の機能の広がりについて触れられている。また、避難訓練に至る前段階で中学生が災害と福祉を学び、まちを歩いて調査を行い、高齢者や障がい者などの要援護者を「自分たちの手で逃がす」と決意したことにも触れられており、中学生が自分たちで問題意識を持ち、主体的に行動した様子が伝わってくる。

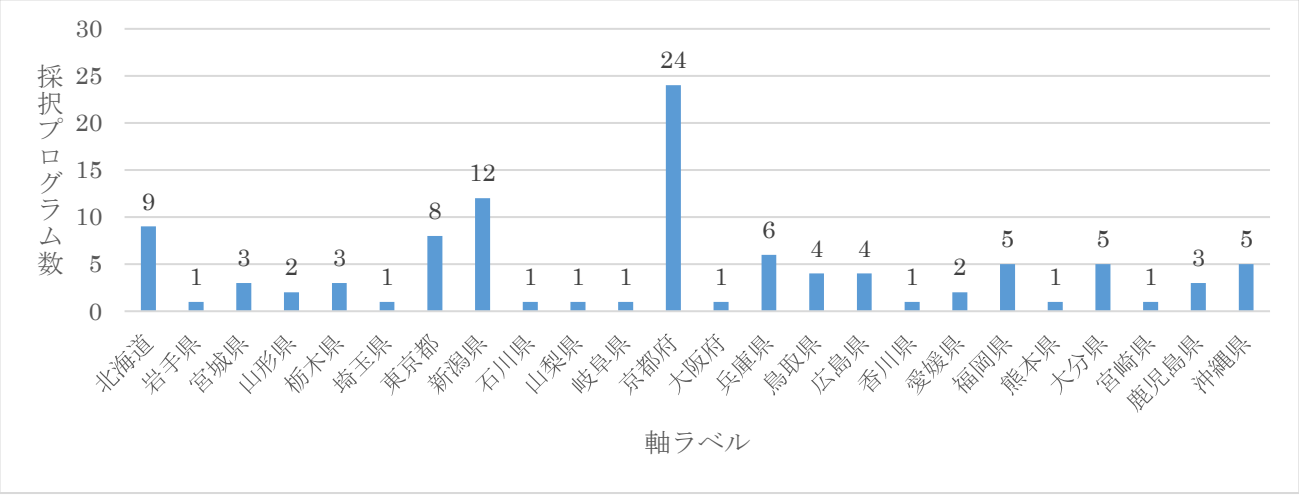
■ ＮＰＯどんどこプロジェクト　2011～2015 年度実績

応募・採択プログラム数の変化



※大分県・佐伯市、福岡県北九州市の児童館は複数の児童館で 1 件のプログラムを実施しており、「プログラム数」＝「児童館数」ではない。

都道府県別採択プログラム数（2011～2015 年度）



当初、どんどこプロジェクトは「一般公募」という形式をとらず、モデル事業として新潟県や京都府、福岡県などで実施した。よって、地域によって多少の偏りがみられるが、2011～2015 年度の採択プログラムは <u>24 都道府県</u>に広がっている。

応募・採択プログラム

2011年度					
県	市区町村	児童館	プログラム名	協力NPO	その他協力者
栃木県	下都賀郡壬生町	壬生町児童館	黒川にサケをよびもどそう！	NPO夢くらぶ"むつみ"	六美南部育成会
東京都	台東区	玉姫児童館	ぽっと◌ぎゅっと オレンジ・プロジェクト ハッピ～ハロウィン in アサヒ商店街	特定非営利活動法人ほおずきの会	アサヒ商店街、浅草ほうらい
東京都	台東区	松が谷児童館	～表現あそび・アートワークショップ～ 粘土であそんじゃおう！	特定非営利活動法人自然生クラブ	
東京都	西東京市	ひばりが丘児童センター	まちをあそぶ	特定非営利活動法人あそび環境Museumアフタフ・バーバン	
新潟県	南魚沼市	塩沢金城わかば児童館	ぬか釜体験・収穫祭	特定非営利活動法人魚沼創造	金城クラブ・わかばクラブ、金城幼稚園金城保育園
新潟県	燕市	西燕児童館	町探検をしながらハザード・マップを作ろう！	特定非営利活動法人新潟NPO協会	西地区まちづくり協議会、燕市西燕・桜町地区食生活改善推進委員、西燕・桜町地区保険推進委員
新潟県	燕市	白山町児童館	路地裏であそばんしょ 第4弾 「町探検をしてハザード・マップを作ろう」	特定非営利活動法人新潟NPO協会	西地区まちづくり協議会、県民生活課、地域振興課、食生活改善推進委員、警察、保健師
岐阜県	多治見市	笠原児童館	児童館のミニ地域循環型社会実験	特定非営利活動法人岐阜県園芸福祉協会、特定非営利活動法人シニアネット多治見	
京都府	京都市	藤森竹田児童館	おもしろサイエンス	NPO人権ネットワーク・ウェーブ21	中学生
京都府	京都市	川岡東児童館	凧を作って 空高く飛ばそう！！	八日市大凧博物館	
京都府	京都市	西京極児童館	愛宕山に登ろう	京都愛宕研究会	
京都府	京都市	深草児童館	深草の竹に学ぶ、竹細工	特定非営利活動法人京都・深草ふれあい隊竹と緑	
京都府	京都市	嵐山東児童館	みんなで「ろくろ」を体験しよう	特定非営利活動法人京都伝統工芸活動支援会 京都匠塾	
京都府	京都市	西賀茂児童館	ようこそおもちゃランドへ「パパも一緒に作ってあそぼう！」竹のおもちゃ世界へ	特定非営利活動法人京都・深草ふれあい隊竹と緑	
大阪府	堺市	大型児童館ビッグバン	冬の味覚に舌つづみ	特定非営利活動法人子どもと遊びを育むまちづくりプロジェクトKid' sぼけっと、特定非営利活動法人にわだに村	
広島県	安芸郡府中町	児童センターバンビーズ	わくわくクリスマス～段ボールをつかった遊び場づくり～	特定非営利活動法人子どもコミュニティネットひろしま	AKI弦楽合奏団（オープニング演奏）、ポパイの会（児童センター応援団）
香川県	観音寺市	遊ゆう児童センター	地引網＆海岸クリーン作戦	子育て応援NPOフレンズ	大豊商工会青年部、観音寺市都市整備課
愛媛県	今治市	枝堀児童館	地域交流ウィンターフェス2011	特定非営利活動法人子どもの未来育成会議ハルモニア	お話サークルてくてく、さんぽアロハス今治明徳短期大学幼児教育科
愛媛県	今治市	菊間児童館	プレイパークきくま	ふれあいステーションきくま	愛馬会、今治明徳短期大学、社協、かわら館、遍照院、ニーニーズ
福岡県	北九州市	中島児童館、長浜児童館、南小倉児童館、三郎丸児童館、南曽根児童館、到津児童館	小倉城で忍者ごっこ	特定非営利活動法人子どもと文化の広場わいわいキッズいいづか 、NPO北九州タウンツーリズム	学生
大分県	速見郡日出町	日出町児童館	ひじまちじどうかんまつり ～キッズタウン2011～	特定非営利活動法人ふれあい囲碁ネットワーク大分	おおいたNPO研究所
2012年度					
県	市区町村	児童館	プログラム名	協力NPO	その他協力者
北海道	札幌市	東苗穂児童会館	東苗穂キッズ農園	特定非営利活動法人人まち育てI&I	グループホーム「満開のふる郷 さくら」、北ガスジェネック株式会社
北海道	札幌市	山の手児童会館	野遊びクラブ	さっぽろ冒険遊びの会	
栃木県	宇都宮市	キッズ・プラザ武蔵台	①ぐんてマンとあそぼう！＋絵本の読み聞かせ②キラキランプを作ろう③～身体をつかって遊ぼう～ 立体4コマ劇場④モコモコひつじを作ってあそぼう～ひつじのことも学べるよ～⑤あそびの王国 ドラムサークル＆手づくりアイスクリーム体験⑥ランチルームで山田くんとあそぼう！	学び場、寺子屋どんぶり	近隣の小学校に通う子どもの保護者、特定非営利活動法人環境Museumアフタフ・バーバン
栃木県	下都賀郡	壬生町児童館	黒川にサケをよびもどそう！	NPO夢くらぶ"むつみ"	六美南部育成会、ありんこ保育園、森の子保育園、メリーランド保育園
東京都	町田市	町田市子どもセンターつるっこ	みんなでたてよう！あそびの基地！	きつねはらっぱ冒険あそび	木材伐採地の地主の方々
東京都	小金井市	本町児童館	音のなる木プロジェクト「作って奏でて音遊び」	特定非営利活動法人遊び・文化NPO小金井こらぼ	音のなる木プロジェクト
新潟県	燕市	白山町児童館	めざせ！西小体育館 「どきどき冒険避難ウォーク」	特定非営利活動法人にいがた災害ボランティアネットワーク、特定非営利活動法人新潟NPO協会	燕西地区まちづくり協議会、自治会、燕市防災課、地域振興課、子育て支援課、社会福祉協議会、高校生、保護者、専門学校生、地域ボランティア
新潟県	燕市	小中川児童館	避難所生活を体験しよう！	特定非営利活動法人にいがた災害ボランティアネットワーク	燕北地区まちづくり協議会、NPO結、白山町児童館、西燕児童館、秋葉町児童クラブ、燕市社会福祉協議会、燕市子育て支援課、防災課、地域振興課、特定非営利活動法人新潟NPO協会、燕市立燕北中学校野球部、一般中学生、保護者、看護専門学校生
新潟県	南魚沼市	塩沢金城わかば児童館	ぬか釜体験・収穫祭	特定非営利活動法人魚沼創造	金城クラブ、わかばクラブ、認定こども園金城幼稚園金城保育園
京都府	京都市	嵐山東児童館	冬の自然と遊ぼう	特定非営利活動法人芦生自然学校	桂坂児童館、厚生員

京都府	京都市	西賀茂児童館	「楽しい食育。学んで・さわって・体験だ！」～みんなで楽しみましょう。食べることの大切さ～	京都食育キャラバン隊	地域の農家
京都府	京都市	桂徳児童館	自然とあ・そ・ぼ！	一般財団法人Positive Earth Nature's School	一般財団法人社会的認証開発推進機構、参加児童の保護者1名
京都府	京都市	川岡東児童館	みんなで行く、初めての親子キャンプ	ネイチャーキッズ	一般財団法人社会的認証開発推進機構、川上司法書士事務所
京都府	京都市	西京極児童館	愛宕山に登ろう	愛宕研究会、特定非営利活動法人きょうとNPOセンター	看護師、花園大学児童研究部
京都府	京都市	深草児童館	深草地域の自然に学ぶモノづくり・ピザづくり体験	特定非営利活動法人京都・深草ふれあい隊竹と緑	京都市深草児童館介助者、学生ボランティア、龍谷大学ボランティアセンター
京都府	京都市	たかつかさ児童館	京都の「食文化」を体験しよう	みんなの食…場Bien-Etre	地域ネットワークプランナー　、府庁NPOパートナーシップセンター
兵庫県	神戸市	原田児童館	子ども市場活性化プロジェクト	まちプロジェクト（神戸大学生ボランティア団体）、あそび心くすぐり隊	灘中央市場、神戸市立上野中学校、認定特定非営利活動法人市民活動センター神戸、特定非営利活動法人神戸まちづくり研究所、（株）コープラン
兵庫県	神戸市	竹の台児童館	みんな　みんな　あつまれ！	たんぽっぽ、特定非営利活動法人社会還元センターグループわ	竹の台児童館開放委員会、竹の台小学校
鳥取県	鳥取市	西品治児童館	鳥取の西品治だでえ～！！	特定非営利活動法人遠足計画	チームN・H・G、西人権福祉センター、富桑地区自治会ほか
広島県	三原市	三原市児童館	パパママ一緒に学校林にいこう	特定非営利活動法人フォレストサポートクラブ	燻製工房SHIN's　SUMOKE
福岡県	北九州市	三郎丸児童館、到津児童館、小嶺児童館、中島児童館、南小倉児童館、南曽根児童館	じどうかんコマーシャル～この番組はじどうかんの提供でお送りします～	特定非営利活動法人KID's work	劇団夢の工場、株式会社映像BOX、株式会社九広
宮崎県	西都市	西都市児童館	自然体験活動～森で遊ぼう～	フェニックス宮崎ネイチャーゲームの会	特定非営利活動法人さいと旗たて会
鹿児島県	枕崎市	別府児童館	親子で自然体験	子育てふれあいグループ自然花	木口屋集落婦人部
沖縄県	沖縄市	沖縄市福祉文化プラザ児童センター	「青空こどもクラブ～川あそびの達人～」 「青空おやこクラブ～親子干潟あそび～」	特定非営利活動法人国際自然大学校　沖縄校　「ネコのわくわく自然教室」	沖縄市福祉文化プラザ児童センター、ファミリークラブ

2013年度

県	市区町村	児童館	プログラム名	協力NPO	その他協力者
北海道	札幌市	石山児童会館	ニコニコ祭り	ニコニコ会	石山まちづくり協議会子ども部会、社会福祉事業所アオゾラ「青空や」、スターバックスコーヒー石山店
北海道	札幌市	みすまい児童会館	みすまい★ふれあいプロジェクト	特定非営利活動法人農業塾風のがっこう	簾舞四区町内会福祉推進委員会
北海道	札幌市	東苗穂児童会館	東苗穂キッズ農園2013	特定非営利活動法人人まち育てI&I	満快のふる郷さくら東苗穂（グループホーム）、ナナカマド公園管理グループ、地域住民、元児童館職員、北ガスジェネック株式会社
新潟県	燕市	小中川児童館	避難所生活を体験しよう！　VOL.2	公益社団法人中越防災安全推進機構地域防災力センター	新潟NPO協会、燕北地区まちづくり協議会、燕市食生活改善推進委員協議会、　NPO結、民生児童委員、燕市子育て支援課、防災課
京都府	京都市	嵐山東児童館	中高生向け事前勉強会　冬の自然で遊ぼう	特定非営利活動法人芦生自然小学校	嵐山東民生児童委員
京都府	京都市	桂徳児童館	けいとくロマンティックナイト	特定非営利活動法人八幡たけクラブ	桂徳民生委員、桂徳学区社会福祉協議会、みつばち保育園、桂徳小学校(場所)、西京少年補導委員会桂徳支部、社会的認証開発推進機構、特定非営利活動法人 子どもの村Kyoto「YOUの家」
京都府	京都市	修徳児童館	こどもまちづくりいいんかい 「おとなもこどもみんなで防災。ちょっと野外でおいしい体験」	一般財団法人Positive Earth Natures School 修徳自治連合会、修徳消防分団	一般財団法人社会的認証開発推進機構、松原商店街
京都府	京都市	深草児童館	深草の竹に学ぶ　～団扇作りとピザ作り体験～	特定非営利活動法人京都・深草ふれあい隊竹と緑	龍谷大学NPOボランティア活動センター
京都府	京都市	たかつかさ児童館	たかつかさ児童館地域探検隊！！プロジェクト	特定非営利活動法人フォーラムひこばえ	京都市市民活動センター
京都府	京都市	西賀茂児童館	変身！児童館が忍者屋敷に！～めざせ忍者～	こども芸術教室、Kidz Lab.（キッズラボ）	大宮自主防災会、北消防署
兵庫県	神戸市	細田児童館	PAPAプロジェクト	特定非営利活動法人ファザーリング・ジャパン関西	小地域子育てネットワーク連絡会
兵庫県	神戸市	魚崎児童館	魚崎親子防災教室	特定非営利活動法人コミュニティ・サポートセンター神戸	魚崎町防災福祉コミュニティ、自治会
鳥取県	鳥取市	西品治児童館	冒険きちへ、いこぉ～！どきどきわくわく　山の巻	特定非営利活動法人遠足計画	チームN・H・G、民生児童委員、青年ボランティア、地域ボランティア他
鳥取県	倉吉	倉吉市福吉児童センター	きつねの小判プロジェクト	特定非営利活動法人明倫NEXT100	西中学校PTA、小鴨地区笑顔のまつり実行委員会
広島県	三原市	三原市児童館	家族で あ・そ・ぼin 三原	特定非営利活動法人ちゃんくす	県立広島大学作業療法学科3年生
福岡県	北九州市	北九州市立南曽根児童館、小嶺児童館、中島児童館、南小倉児童館、山王児童館、黒崎児童館、菅生児童館	商店街であそぼう！～お化け屋敷をしよう～	劇団夢の工場、特定非営利活動法人KID's work	大工、熊手銀天街協同組合、大学生ボランティア

熊本県	上益城郡益城町	益城町児童館	地域の障害児・者を理解するプログラム	特定非営利活動法人ボランティア仲間九州ラーメン党	とっておきの芸術祭in熊本実行委員会、特定非営利活動法人さをりひろば熊本さをり会ボランチ、熊本総合医療リハビリテーション学院、ましきメッセもやい市、現代っ子センター、（ケナ・クンバ、日本手話ダンスひかり、熊本手話ダンスクラブしらゆり他）
大分県	速見郡日出町	日出町児童館	心のバリアフリープロジェクト ～地域で共に生きる～	特定非営利活動法人あっとほぅむぷれいす、特定非営利活動法人レスキューサポート、・えいぶる・ねっと	カレイなる日出町母親クラブらんらん♪、特定非営利活動法人支援ハウス豊さん家 こどもデイサービスひまわり
沖縄県	沖縄市	沖縄市福祉文化プラザ児童センター	①「サンゴ礁で海あそび」 ②「家庭でも活かせる　安全講習　～野外活動～」 ③「おやこ干潟のピクニック」	特定非営利活動法人国際自然大学校　沖縄校 「ネコのわくわく自然教室」	沖縄市福祉文化プラザ児童センター、ファミリークラブ ‘結’

2014年度

県	市区町村	児童館	プログラム名	協力NPO	その他協力者
北海道	札幌市	東苗穂児童会館	シリーズ～つくってたべよう！日本の加工食品～	特定非営利活動法人人まち育てI&I	東区食生活改善推進協議会、天使大学食物栄養学科
北海道	札幌市	もみじ台児童会館	なないろドーナツ	特定非営利活動法人シーズネット	もみじ台まちづくりセンター、もみじ台管理センター、もみじ台地区民生児童委員 協議会、もみじ台地区青少年育成委員会、厚別区食改善推進員協議会、熊の沢公園の自然に親しむ会、もみじ台地域の茶の間
宮城県	仙台市	榴岡児童館	地域の安全マップを作ろう	特定非営利活動法人まちづくり政策フォーラム、仙台駅東エリアマネジメント協議会	榴岡小学校、榴岡おやじクラブ、榴岡地区民生委員・児童委員
宮城県	仙台市	立町マイスクール児童館	仙台白菜物語～ふるさと　野々島を訪ねて～	一般社団法人リエゾンキッチン、食の学人の会	仙台市荒巻マイスクール児童館
山形県	北村山郡	ふたば児童館	畑くらぶで広げよう！地産解消と紅花パワー	畑くらぶ応援団、ばあちゃんクッキング隊	ふたば母親クラブ、横山母親クラブ
埼玉県	川口市	戸塚児童センター　あすばる	たけのこプロジェクト　～障がい者支援　障がいのある子もない子も共に育つ～	特定非営利活動法人すてっぷ	NPOピース青空教室、川口市立戸塚児童センター　ばるばるの会、埼玉大学STEM教育センター、大学生、自然観察員、東京芸術大学　、東京イボンヌ劇団、シンガーソングライター、お話しボランティア
新潟県	燕市	小中川児童館	収穫祭	特定非営利活動法人新潟NPO協会、園芸福祉にいがた	特定非営利活動法人新潟NPO協会、燕北地区まちづくり協議会、市食生活改善推進委員 こどもの森
新潟県	燕市	児童研修館　こどもの森	森のだいどころ『もぐもぐ』収穫祭	特定非営利活動法人新潟NPO協会、園芸福祉にいがた	はっぴーザウルス、燕市食生活改善推進委員協議会、（公社）中越防災安全推進機構　地域防災力センター、燕市子育て支援課・防災課・健康づくり課、長岡地域振興局、小中川児童館、サークル☆パンダ（高校生ボランティアサークル）、
新潟県	新潟市	豊栄児童センター	川遊び　～カッパ体験～	特定非営利活動法人五泉トゲゾの会	新潟市北区役所、学生ボランティア、地域組織クラブ（母親クラブ）、豊栄じどせんふぁみりークラブ、新潟NPO協会
新潟県	南魚沼市	塩沢金城わかば児童館	秋の自然体験（山歩き・クラフト作り）	特定非営利活動法人六日町観光協会	上越国際プレイランド、認定こども園金城幼稚園・保育園、保護者ボランティア
石川県	金沢市	浅野町児童館	夢のせて大きな紙飛行機飛ばしちゃおう！！ー子どもの夢を育み、繋ぐ人の輪ー	特定非営利活動法人百万石ワールドカフェ	ワイワイ倶楽部（お母さんの会）
山梨県	笛吹市	八代児童センター	子どもタウンマップを作ろう！	特定非営利活動法人ふえふき旬感ネット	笛吹こどもフェスタ実行委員会
京都府	京都市	桂徳児童館	けいとく　スマイルプロジェクト	特定非営利活動法人京都コミュニティ放送、特定非営利活動法人子どもの村Kyoto	桂徳自治連合会、桂徳学区社会福祉協議会、地域諸団体、地域商店（コンビニ・商店）、 みつばち保育園
京都府	京都市	深草児童館	深草の竹の魅力を輪になって感じよう	特定非営利活動法人京都・深草ふれあい隊竹と緑	龍谷大学NPOボランティアセンター、伏見工業高校、伏見区役所深草支所まちづくり推進課・深草エコまちステーション
京都府	京都市	修徳児童館	こどもまちづくりいいんかい「サンタさんへ送る手紙」	特定非営利活動法人フリンジシアタープロジェクト	マチカドSOZO館、株式会社HLC　つくるビル、（坂の途中）八百屋さん、（京都嵯峨芸術大学）、修徳自治連合会、修徳消防分団、松原京極商店街
京都府	京都市	御室児童館	自然とあそぼう！	特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろば	
兵庫県	神戸市	魚崎児童館	親子防災教室「魚崎町防災福祉について学ぼう」～阪神淡路大震災かた20年　自分の命は自分で守る子どもに～	特定非営利活動法人コミュニティ・サポートセンター神戸	魚崎町防災福祉コミュニティ、魚崎北部・南部民生委員児童委員協議会、魚崎・魚崎南部ふれあいのまちづくり協議会
鳥取県	倉吉市	福吉児童センター	きつねの小判プロジェクト	特定非営利活動法人明倫NEXT100	倉吉西中学校、西中PTAグループ「いただきます」、小鴨地区笑顔のまつり実行委員会、小鴨公民館、明倫地区振興協議会、めいりん祭り実行委員会、明倫公民館、福吉解放文化祭実行委員会、西保育園、ひまわり保育園、聖テレジア認定こども園、小鴨保育園、鳥取大学、島根大学、鳥取環境大学、中部地区各高等学校、倉吉市教委、明倫地区体育部、はばたきクラブ、中央児童館、はばたき人権文化センター
広島県	安芸郡	府中児童センター　バンビーズ	譜宙雷舞　2014　（ふちゅうらいぶ　2014）	特定非営利活動法人ワーカーズコープ、広島市北部 若者サポートステーション	青年活動団体　志楽蝶、府中元気フォーク村
福岡県	北九州市	菅生児童館　中原児童館、中島児童館、南曽根児童館、南小倉児童館、小嶺児童館、山王児童館	こども印刷部	特定非営利活動法人KID's work、わくわーく	特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター、青い月、日高印刷、朝日プリンテック、ガリ版研究会
大分県	佐伯市	佐伯市児童館連絡会（佐伯児童館、蒲江児童館、上浦児童館、弥生児童館）	子どもとつくる避難経路ウォーキング	特定非営利活動法人おおいた県防災教育振興協会、特定非営利活動法人エー・ビー・シー野外教育センター、特定非営利活動法人おおいたNPOデザインセンター	佐伯市社会福祉協議会・さいき母親クラブ、佐伯市消防本部・佐伯警察署警備課、佐伯市（防災危機管理課・子ども福祉課）、佐伯市防災士会、さいき元気っ子クラブ
大分県	速見郡日出町	日出町児童館	心のバリアフリープロジェクト～地域で共に生きる～	特定非営利活動法人あっとほぅむぷれいす、特定非営利活動法人レスキューサポート九州、障害児余暇支援団体えいぶる・ねっと	カレイなる母親クラブらんらん♪、Top Water' s Club、特定非営利活動法人支援ハウス 豊さんの家 ひまわり、日出支援学校、発達障がい児の親と共に歩む会「つむぐ」、別府溝部学園短期大学ハンドベル部

鹿児島県	南さつま市	キッズランド児童館	遊びを通して地域ぐるみで喜びを体験する	特定非営利活動法人NPOかごしまネットワーク会議	地区公民館（単位）、地域活動組織紙ふうせん
沖縄県	浦添市	森の子児童センター	「地域福祉マップ」づくりと福祉体験	特定非営利活動法人バリアフリーネットワーク会議、那覇市NPO活動支援センター、特定非営利活動法人沖縄県障がい者スポーツ協会	神森中学校区地域保健福祉センター、勢理客自治会、地域民生委員、厚生保護女性会

2015年度

県	市区町村	児童館	プログラム名	協力NPO	その他協力者
北海道	札幌市	東苗穂児童会館	地域で体験・親子で体験！ニッポンの手仕事	エコビレッジライフ体験塾	北海道大学サークルいなかっぺ、天使大学栄養学科、さくら東苗穂
北海道	札幌市	もみじ台ふれあい児童会館	子どもレストラン・ふれあい交流会（収穫祭）	シーズネット	もみじ台街づくりセンター、もみじ台管理センター、もみじ台地区民生児童委員協議会、もみじ台地区青少年育成委員会、厚別区食改善推進協議会、もみじ台地域の茶の間、厚別区介護予防センター、みずほ楓会
岩手県	気仙郡住田町	下有住児童館	「夕涼み会」と「収穫祭」で子どもの笑顔を生み出し隊	住田子ども応援隊、一般社団法人巴サポート、SUMICA	中上仮設団地自治会、各自治公民館（新切自治公民館・外舘自治公民館・月山自治公民館・火の土自治公民館）、子育てサークル　ピ・カ・ブー
宮城県	仙台市	荒町児童館	広瀬川とサケ	広瀬川エンジョイフォーラム	広瀬川名取川漁港、広瀬川サケプロジェクト、広瀬川市民会議
山形県	大石田町	ふたば児童館	秋の収穫祭～紅花パワー＆ずんだ祭り～	畑の達人くらぶ、野菜の達人くらぶ	ふたば母親クラブ、横山母親クラブ
東京都	墨田区	フレンドリープラザ立川児童館	すみだプログラミングCAMP！「ゲームクリエイター」の仕事を体験しよう	特定非営利活動法人THOUSAND-PORT、特定非営利活動法人地域コミュニティ研究所CicoLavo	寺子屋2.0、墨田川高校　パソコン部
東京都	東村山市	北山児童館	異年齢交流プロジェクトin北山児童館	特定非営利活動法人子どもと文化のNPO東村山子ども劇場	東村山市老人クラブ連合、東村山市老人クラブ第二寿会
東京都	町田市	玉川学園子どもクラブ　ころころ児童館	まち中が、子どもを守る児童館！	玉川学園地区社会福祉協議会	中央幼稚園、さくら保育園、玉川学園町内会、玉川学園商店会、町田第五小学校PTA有志、小さなギャラリー会、１１０番の家
新潟県	燕市	燕市児童研修館「こどもの森」	森のだいどころ『もぐもぐ』収穫祭 ～もぐもぐBOUSAI！ファンタジー～	特定非営利活動法人新潟NPO協会、特定非営利活動法人ふるさと未来創造堂、園芸福祉つばめ	公益社団法人　中越防災安全推進機構、燕市食生活改善推進委員協議会、国土交通省北陸地方整備局信濃川河川事務所、燕第一地区まちづくり協議会、越後中央農業協同組合、ボランティアグループみどり、おたすけ隊、西小グリーンボランティア、小中川児童館、燕市観光協会、まんまるほっぺ、おりがみサークル☆パンダ
京都府	京都市下京区	京都市修徳児童館	こどもまちづくりいいんかい こどもだって、こどもだから、こども松原通（みち）の駅	特定非営利活動法人フリンジシアタープロジェクト、劇団衛星	松原商店街振興組合、松原通界隈活性化活動、プロジェクト委員会、京都大学高田研究室、まちかどSOZO館、修徳児童館学童クラブ保護者プロジェクト、修徳児童館乳幼児クラブ保護者プロジェクト、フラダンスサークル、修徳自治連合会、有隣自治連合会、豊園自治連合会
兵庫県	神戸市西区	有瀬児童館	花と緑で笑顔いっぱい　ありせじどうかん	NPOエコレンジャー	JA兵庫六甲伊川支店、伊川谷花き青年部
福岡県	北九州市	北九州市立 小嶺児童館、山王児童館、菅生児童館、中島児童館、南小倉児童館、南曽根児童館	水探求部	日本カブトガニを守る会福岡支部、北九州インタープリテーション研究会、北九州市市民活動サポートセンター、KID's work	特定非営利活動法人ふくおかNPOセンター、直方川作りの会、北九州市関連施設
大分県	佐伯市	佐伯市児童館連絡会（佐伯児童館、蒲江児童館、上浦児童館、弥生児童館）	第2回「子どもとつくる避難経路ウオーキング」	ABC野外教育活動センター、おおいたデザインセンター、虹の翼、おおいた防災教育振興協会	さいき母親クラブ、佐伯市防災危機管理課、佐伯市子ども福祉課、佐伯市消防本部、佐伯市警察署警備課、佐伯市社会福祉協議会
鹿児島県	南さつま市	キッズランド児童館	地域ぐるみで遊ぶ楽しさやよろこびを体験する	NPOかごしまネットワーク会議	地区公民館、地区老人クラブ、地域活動組織紙ふうせん
沖縄県	浦添市	森の子児童センター	「防災訓練の実施」と地域連携交流学習	特定非営利活動法人琉球ニライ大学	神森中学校区地域保険福祉センター、勢理客自治会及び地域民生委員、浦添市地域包括支援センター（てぃだ）、沖縄国際大学　稲垣　暁ゼミ生、浦添市防災危機管理室、浦添警察署、浦添市消防本部
沖縄県	糸満市	糸満がじゅまる児童センター	”みーかがん”の紙芝居をつくろう	特定非営利活動法人ハマスーキ、子育て応援隊NPOいっぽ	糸満高校美術部、母親クラブ

■ おわりに～児童館の現状と「NPO どんどこプロジェクト」～

今、子どもたちは地域でどのように生活しているのでしょうか。

就学している子どもの生活領域は学校・家庭・地域にあると言われてきました。この3つの領域のバランスや中身はどうでしょうか。学校は授業数も増え、小学校の子どもたちの放課後の時間は減少傾向にあります。児童虐待や子どもの貧困などがクローズアップされていますが、家庭に居場所はあるでしょうか。残された地域は、人口減少、少子化に加えて、子どもを狙う犯罪も増え、安全でも安心でもないところがあるようです。

しかし、地域の子育て力であるとか、地域の教育力という言葉に代表されるように、地域はまさに第三の場所として、重要な役割を果たす可能性を秘めていると考えられてきました。そして、児童館は地域に立脚した、子どもの遊びと生活を護る拠点としての役割を長きにわたって期待されてきました。

近年、残念なことに、少子化や建物の老朽化を理由にして、児童館の数が減ってきています。また、地方財政も厳しい折、活動自体が縮減傾向にあるようです。指定管理者制度の導入も広がり、ともすれば、児童館の仕事が華やかなイベントを仕掛けることや単なる施設管理のように捉えられ、本来の「子どもの健全育成」や「地域生活の拠点」としての機能が損なわれていると見聞きしています。

確かに児童館の特性である「0～18 歳未満のすべての子どもたちを対象とし、子どもが自ら行くか行かないかを選択できる」という対象の網羅性や利用の継続性、自由意志というものは数値的な評価の中ではとても測りづらく、一般的には光が当たりにくいものかもしれません。しかしながら、地域での子どもの生活を保障する大切な場であることを誰かが声をあげ続けなくてはなりません。

その誰かを児童館の職員だけではなく、地域の中にいる思いのある NPO のスタッフやボランティアの方になっていただくのも、この NPO どんどこプロジェクトのミッションの一つでもあります。これまで参画してくださった NPO の方々は「こんな面白い場所が地域にあったとは知らなかった」「児童館は地域の人が関わりやすい」と、児童館に対して好評価をつけてくださりました。

児童館のプログラムのキーコンセプトは「遊びがある」ということです。NPO どんどこプロジェクトでも「遊び」が人をつなぎ、元気にさせ、地域を豊かにするプログラムがたくさん生まれてきました。多くの児童館が NPO とパートナーとなり、子どもの地域生活を豊かにすることをさらに促進されることを期待しています。

一般財団法人児童健全育成推進財団
阿南　健太郎

「どんどこブックⅡ」編集委員会

阿南　健太郎（児童健全育成推進財団）

古賀　桃子（ふくおか NPO センター）

藤澤　めぐみ（日本 NPO センター）

吉田　建治（日本 NPO センター）

どんどこブックⅡ

子どものための児童館とＮＰＯの協働事業　2011 年度－2015 年度 報告書

認定特定非営利活動法人　日本ＮＰＯセンター

〒100-0004 東京都千代田区大手町２－２－１ 新大手町ビル２４５

ＴＥＬ：０３－３５１０－０８５５　ＦＡＸ：０３－３５１０－０８５６

日本ＮＰＯセンターウェブサイト　www.jnpoc.ne.jp

プロジェクトウェブサイト　www.npo-dondoko.net

第１版　2017 年３月３日